

國學院大學學術情報リポジトリ

新聞において女性はどのように表現されているか：
「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第四回調査を
中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 和子, 女性と新聞メディア研究会, 諸橋, 泰樹, 村田, 太郎, 實川, いづみ, 千葉, 智滋, 久保, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000134

新聞において女性はどうのように表現されているか

——「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第四回調査を中心に——

田 中 和 子
女性と新聞メディア研究会

はじめに

- 1 現在も続く新聞メディアの影響力
 - 2 男女平等政策の進展と新聞のジェンダー表現分析の意義
 - 3 新聞におけるジェンダー表現の三類型
 - 4 調査時の社会状況
- I 女性強調表現の動向
- 1 「女性冠詞」の使用により強調される女性のジェンダー
 - 2 ジェンダーを含み込んだ職業語の無自覚的使用
- II 女性隠し表現の動向
- 3 「サラリーマン」の用法にあらわれた新聞のジェンダー観
 - 4 他者との関係で女性を表現することばの頻用
 - 5 女性であることを不必要に強調するステレオタイプ表現
 - 6 女性を社会の表面から隠蔽する表現
- III ダブルスタンダード表現の動向
- 7 敬称の性別による使い分けにみるダブルスタンダード
- おわりに

はじめに

1 現在も続く新聞メディアの影響力

女性と新聞メディア研究会は、二〇〇一年一〇月、一九八五年からほぼ五年おきに実施している「新聞紙面にあらわれたジェンダー」調査の第四回目を実施した。前回調査を行ったのは一九九六年のことである。この間に世紀が変わり、世界情勢、日本の情勢は大きく変化し、またジェンダー問題を取り巻く環境も変化した。

これと同時に、メディア界の地図も大きく変わりつつある。二〇世紀末には「斜陽化」が言われるようになってきた新聞メディアは、テレビのみならずインターネットや携帯電話などの新しく普及した即時的メディアによって、メディア利用の上でも、また産業的にも押され気味で、そのジャーナリズム機能の衰えが指摘されるようになってきている。

しかしながら、二一世紀に入った今も、新聞の影響力は、決して小さいものではない。

たとえば、日本新聞協会が二〇〇三年に行ったメディアの機能に関する比較調査によると、新聞は「情報源として欠かせない」の六割を筆頭に、「社会に対する影響力がある」「地域や地元の事がよく分かる」「知的である」「社会の一員としてこのメディアに触れていることは大切だ」「教養を高めるのに役立つ」「日常生活に役立つ」「読んだ事が記憶に残る」の各項目で第一位を独占し、テレビなど他のメディアを凌駕している。⁽¹⁾

実際、新聞は、各紙合計で一日に五三〇〇万部が発行され、計算上は一世帯あたり一部以上閲読されており、接

触率はテレビの九九・五％に次ぐ九四・五％を誇っている。一週間あたりの接触日数も、テレビ六・七日に次ぐ五・七日と、ほぼ毎日接触がなされているという実態がある(ちなみに、朝刊の平日閲読時間量は、平均で二六・二分、女男別にみると女性二四・一分、男性二八・三分、年代別にみると中・高年層によく接触されており、五〇代は三〇・三分、六〇代は三七・五分と、他の年齢層より長くなっている)。

したがって、このようなメディア特性と接触実態をもった新聞の中で日々用いられているジェンダー表現を調査・分析することの意義は、いまだに衰えていないと言うべきだろう。

2 男女平等政策の進展と新聞のジェンダー表現分析の意義

この間、女性政策に関して、一定程度の進展はみられたという印象がある。

総理府男女共同参画室(当時)は、一九九五年の国連第四回世界女性会議(北京会議)で採択された「北京行動綱領」の精神を生かし、翌年には「男女共同参画ビジョン」答申に基づく「男女共同参画二〇〇〇年プラン」を発表した。また、一九九九年には男女共同参画社会基本法が施行され、同年、改正男女雇用機会均等法も施行されて、国レベルでの男女平等政策の基盤が整った。全国の地方自治体では、国の基本法を受けて新たな行動計画が策定され、さらなる男女平等推進のための条例の策定も相次いだ。

二〇〇〇年にはニューヨークの国連本部において女性二〇〇〇年会議が開催され、北京行動綱領の重要性が再確認された。また、省庁再編により、それまでの総理府男女共同参画室は、内閣府男女共同参画局となり、これまでより格上げされた。

こうした動きに伴い、新聞メディアにおいても、従来のような性差別的表現が減少してきているのかどうか、あるいはジェンダーに関するより公正な表現への萌芽がみられるのかどうか、それらを知る上でも、第四回目にあたる本調査の意義は小さくない。

3 新聞におけるジェンダー表現の三類型

新聞にみられるジェンダー表現は、大きくは、左記①から③の三つの形態に分類され、それぞれはさらに、アルファベットで示したようなより具体的な表現方法がなされている。

① 「女性強調」——女性としての存在や役割をもつばら強調し、突出させて注目させる。

a 報道される女性の職業や肩書きの上に、当事者が女性であることを明示する「女性冠詞」がつけられる。

b 職業や家族との関連で、女性の役割が強調される。

c 「女性に関するステレオタイプ」表現によって、ことさらに女性であることが強調される。

② 「女性隠し」——女性の存在を紙面の背後に退かせ、女性の姿を見えなくさせる。

a 世帯や家族を、もつばら男性が代表する。

b 男性に付随ないしは従属させられた表現によって、女性が隠されてしまう。

③ 「ダブルスタンダード表現」——女性を男性とは異なった規準を用いて表現する。それぞれはさらに、次に示すような具体的な形態がとられている。⁽³⁾

a 女性について報道する際、地位や業績で扱わない。

b 女性と男性で異なる敬称を使用する。

c 女性は名のみ、男性は姓または姓名で表現する。

冒頭でもふれたように、女性と新聞メディア研究会では、一九八五年、九一年、九六年の同一時期(二〇月前半)に、同一全国紙三紙(朝日新聞、毎日新聞、読売新聞)を、同一手法によって、右記①から③の分析軸を中心に、定量的な調査を行い(八六年にも一部調査を行った)、その都度『国学院法学』において分析結果を発表してきた。⁽⁴⁾本稿は、継続調査の第四回目にあたる調査結果を分析したものである。目次に示した各章において、まず二〇〇一年のデータについて分析を行い、続いて同じ章の最後の部分で、過去のデータとの経年比較を行い、変化をみた。今回量的に調査・分析したのは、二〇〇一年一〇月一日から一五日までの朝日、毎日、読売の朝刊・夕刊の投書、連載小説、マンガ、テレビ・ラジオ面、広告を除いた全ての記事である。なお、本論で記事を引用する場合、朝刊については日付のみを入れ、夕刊については日付の下に夕刊と記した。

4 調査時の社会状況

今回の調査が行われた二〇〇一年一〇月前半は、新聞紙面が活性化する大きな出来事が相次いで起った時期でもあった。何よりも、前月の九月一日に、アフガニスタンのテロ組織アルカイダのオサマ・ビンラディンが主犯とされる「米・同時多発テロ」が発生し、ニューヨーク世界貿易センタービルが破壊され、世界中が大きく揺らいでいた。米国はアフガニスタンへの報復を準備し、日本もその「支援」のために自衛隊を派遣するかどうか問われ、「テロ対策特別措置法」をめぐって、小泉純一郎首相が、憲法九条と憲法前文の間には「すき間がある」と

発言(一〇月五日)するなど、国会で議論が続き、国論を二分していた。

一〇月六日にはパキスタンへ逃れたアフガニスタン難民「支援」のために自衛隊機が派遣され、七日にはついに米英軍がアフガニスタン攻撃を開始。その後、首都カブールなどへの爆撃を続け、軍事拠点ばかりでなく民間施設にまで被害が及ぶ事態となった。また一二日には米・ニューヨークでテロの一環とみられる炭そ菌が発見された。今回の調査はこうした全世界を揺るがした一連の事件の最中に行われた。

その他、この時期に紙面で扱われた大きな出来事としては、高橋尚子のベルリンマラソンでの世界記録達成(九月三〇日)、小田急線の高架化工事に対する東京地裁による違法判決(一〇月三日)、黒海でのミサイル誤射によるロシア機の墜落(一〇月四日)、プロ野球ヤクルトの優勝(一〇月六日)、野依良治名古屋大教授のノーベル化学賞受賞(一〇月一〇日)、などをあげることができる。

I 女性強調表現の動向

1 「女性冠詞」の使用により強調される女性のジェンダー

(1) 高い頻度で出現する「女性冠詞」

新聞記事の中にみられる女性と男性に関する非対等な表現の最も典型的な形は、男性を暗黙の標準とみなし、女性を報道する際にはその職業や社会的役割に、女性であることを表示する「女性冠詞」をかぶせるというものである。

る。たとえば、男性について報道する場合には、会社員の誰それと記すところを、女性の場合には、女性従業員の誰々と、「女性冠詞」をつけて、女性であることを「^し徴つける」書き方をするのである。

「女性冠詞」の主要なものには、「女」がつくもの、「女性」がつくもの、「女子」がつくもの、「女流」がつくものの四種類がある。

まず、「女」がかんむりにつくことばをみてみると、表1に示したように、期間中三紙合計で一七七件を数えた。その中で最も多かったのは「女優」の六七件で、「女」がつく冠詞の五七・三%と過半数を占めている。後述するように今回「男優」という語は全く出てこなかった(男性に対しては多くの場合、「無徴」の「俳優」という語を使っていると思われる)。この例から

も、女性だけが特別扱いされる表現が、未だに多用されていることがみてとれる。

上記の「女優」を筆頭に、以下「女王」(二七件)、「女兒」(八件)、「女神」(六件)などが続いたが、「女」冠詞

表1 女性冠詞“女”がつくことば

(単位:件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	女優	23	22	22	67
2	女王	8	4	5	17
3	女兒	2	0	6	8
4	女神	1	5	0	6
5	女医	3	0	0	3
	女主人	2	0	1	3
7	女主人公	2	0	0	2
	女帝	0	2	0	2
9	女生徒	1	0	0	1
	女師匠	1	0	0	1
	女刑事	1	0	0	1
	女エイリアン	0	1	0	1
	女武者	0	1	0	1
	女親分	0	1	0	1
	女船頭	0	1	0	1
	女仙人	0	0	1	1
	女店主	0	0	1	1
	合 計	44	37	36	117

表 2 女性冠詞“女性”がつくことば (単位：件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	女性記者	4	9	10	23
2	女性職員	0	9	8	17
3	女性社員	2	7	5	14
4	女性作家	2	5	6	13
5	女性従業員	1	2	5	8
6	女性監督	0	1	6	7
7	女性店員	3	1	1	5
	女性検事	2	3	0	5
9	女性患者	0	0	4	4
	女性歌手	0	0	4	4
11	女性社長	3	0	0	3
	女性詩人	3	0	0	3
	女性教師	2	1	0	3
	女性会社員	1	0	2	3
16	女性スタッフ	0	0	3	3
	女性収容者	2	0	0	2
	女性歌人	2	0	0	2
	女性ドライバー	1	1	0	2
	女性演歌歌手	1	0	1	2
	女性感染者	0	2	0	2
	女性科学者	0	2	0	2
	女性研究者	0	1	1	2
	女性職人	0	0	2	2
	女性事務職員	0	0	2	2
27	女性教諭	0	0	2	2
	女性客	0	0	2	2
	女性編集者	1	0	0	1
	女性知識人	1	0	0	1
	女性総合職	1	0	0	1
	女性捜査官	1	0	0	1
	女性上院議員	1	0	0	1
	女性写真家	1	0	0	1
	女性顧客	1	0	0	1
	女性演劇人	1	0	0	1
	女性医師	1	0	0	1
	女性グループ	1	0	0	1
	女性キャスター	1	0	0	1
	女性アシスタント	1	0	0	1
女性アイドル	1	0	0	1	

のつく語の種類は、全部で一七種類みられた。三紙別の「女」冠詞の使用頻度は、朝日が四四件とやや多く、毎日の三七件、読売の三六件を上回っている。

次に、「女性」がかんむりにつくことばは、表 2 に示したように、合計一八七件みられ、女性冠詞全体のうちで

最も使用頻度が高かった。「女性」を冠した語の種類は七六種類にのぼる。表2からわかることは、「女性」というかんむりは、女性の職業のほかに、社会的地位や役割を表すときに使用される傾向がみられるということである。今回、「女性」が冠された語のうち最も多く用いられていたのは「女性記者」の二三件である。これは、九・一一

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
27	女性労働者	0	1	0	1
	女性表現者	0	1	0	1
	女性探偵	0	1	0	1
	女性生徒	0	1	0	1
	女性人気アイドルグループ	0	1	0	1
	女性消費者	0	1	0	1
	女性主事	0	1	0	1
	女性支店長	0	1	0	1
	女性殺人犯	0	1	0	1
	女性検察事務官	0	1	0	1
	女性警察官	0	1	0	1
	女性軍人	0	1	0	1
	女性運転手	0	1	0	1
	女性ランナー	0	1	0	1
	女性マネージャー	0	1	0	1
	女性ヌーディスト	0	1	0	1
	女性シンガー	0	1	0	1
	女性ヴォーカル	0	1	0	1
	女性PTA役員	0	1	0	1
	女性PTA会長	0	1	0	1
	女性薬剤師	0	0	1	1
	女性担当者	0	0	1	1
	女性三人組	0	0	1	1
	女性芸人	0	0	1	1
	女性経営者	0	0	1	1
	女性銀行員	0	0	1	1
	女性救急隊員	0	0	1	1
	女性技術者	0	0	1	1
	女性企業家	0	0	1	1
	女性会長	0	0	1	1
	女性画家	0	0	1	1
	女性映画監督	0	0	1	1
女性宇宙飛行士	0	0	1	1	
女性デザイナー	0	0	1	1	
女性シェフ	0	0	1	1	
女性アンカー	0	0	1	1	
女性アナウンサー	0	0	1	1	
	合 計	42	64	81	187

の米・同時多発テロに関連してアフガニスタンのタリバン支配地域で英国の記者が拉致・解放された事件が影響している。以下、「女性職員」(一七件)、「女性社員」(二四件)、「女性作家」(二三件)が続いた。「女性記者」の使用回数が二三件に達していた一方で、これも後述するが「男性記者」の使用回数はわずか一件にとどまっていたことも、「無徴」の男性に対照させる形で女性が「有徴」の性として表現されるという新聞表現の「定型」が、未だ健在であることを示唆している。

「女性」冠詞の出現頻度を新聞別にみると、読売での使用量が最も多く八一件に達し、朝日の四二件、毎日の六四件を大きく上回っている。

第三に、「女子」がかんむりにつくことばは、表3に示したように、合計八一件、その中でも「女子生徒」が三三件と、「女子」冠詞の四〇・七%を占めている。二位以下は、「女子高生」一三件、「女子中学生」七件、「女子大生」六件、そして「女子短大生」五件、「女子高校生」「女子学生」各四件が続いている。合計では、一四種類の語に「女子」冠詞がつけられていた。「女子」ということばは、成人をイメージさせる「女性」と異なり、まだ年齢的に幼さを残す生

表3 女性冠詞「女子」のつくことば

(単位:件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	女子生徒	5	15	13	33
2	女子高生	5	1	7	13
3	女子中学生	3	3	1	7
4	女子大生	2	4	0	6
5	女子短大生	0	2	3	5
6	女子高校生	1	0	3	4
	女子学生	0	3	1	4
8	女子アナ	0	3	0	3
9	女子プロ	1	0	0	1
	女子体操選手	1	0	0	1
	女子工具	1	0	0	1
	女子中生	0	1	0	1
	女子主将	0	1	0	1
	女子児童	0	0	1	1
合 計		19	33	29	81

徒や学生に対して使われる場合が多い。一方、使用頻度は低いものの、「女子アナ」「女子プロ」「女子工員」など、職業人に「女子」がつけられるケースもみられた。今や「女子アナ」は固有の職業名となった観があり、テレビ界・週刊誌界の恰好のゴシップのネタとなっているが、「華やかな職業」として注目されている一方で、その背後には「若さ」や「美しさ」、「女性であること」を周囲も本人も「売り」にし、視聴者・読者もそれを「消費」する、芸能人的職業として扱われている。

これとは対照的に、「男性冠詞」つきのことばのうち、「男子」を冠したことばの中で職業を表すものは、皆無であった。

「女子」冠詞を三紙別にみると、朝日は一九件だが、毎日で三三件、読売で二九件と多くなっている。

第四に、「女流」がかんむりにつくことばは、合計五件であった。表4からもわかるとおり、「女流」が付くのは「画家」「書画家」「詩人」「棋士」など特定分野の職業のみである。二〇〇〇年版の共同通信社「記者ハンドブック(第9版)」では、「女流」↓「女流名人」などの固有名詞以外に使わない⁽⁵⁾とされている。つまり、棋士や画家など特定の分野で、その組織等が固有の名称として定めている場合以外はことさらに使わないという取り決めである。確かに「女流文学賞」や「女流名人」といった語は、固有の賞やタイトルをあらわす語である(本調査においても、これらの固有名詞的に用いられている語は、女性冠詞としてカウントしていない)⁽⁶⁾が、今回のデータをみると、それ以外にも「女流」ということばがいまだに用いられている。伝統的な芸術・芸能・著述業などに従事する

表4 女性冠詞「女流」のつくことば

(単位：件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	女流日本画家	0	0	2	2
2	女流書画家	0	1	0	1
	女流棋士	0	1	0	1
	女流詩人	0	0	1	1
	合 計	0	2	3	5

女性に、この語が与えられる傾向があるようである。朝日は皆無であったが、毎日で二件、読売で三件みられた。最後に、表には掲載しなかったが、「婦人」がかんむりにつくことばとして、「婦人警官」が一件あった。

以上で四種類に分類した「女性冠詞」を合計すると、二〇〇一年一〇月前半の一五日分で三紙合計三九〇件みられ（「婦人」を除く）、一日で朝・夕刊合わせて一紙あたり平均八・七件使われていた計算となる。三紙別には、朝日で七・〇件、毎日で九・一件、読売で九・九件であった。

(2) 出現頻度が低い「男性冠詞」

では、男性が「男性冠詞」によって男であることを強調される例はどれぐらいあるのだろうか。男性冠詞の主要なものには、「男」、「男性」、「男子」の三種類がある。

まず「男」がかんむりにつくことばは、表5に示されているように、「男児」一〇件を筆頭に、三種類、合計一二件であった。「男エイリアン」(毎日一〇月九日夕刊)とは奇妙な性別名称だが、これは「女エイリアン」とセットで出現していた。宇宙生物であるエイリアンにもセックスの別があるらしい。これは、女性と男性を同一記事に載せる場合、どちらにも性別冠詞を付けるという「平行表現」が少しずつ増えているきざしとみることもできよう。また「男神」(朝日一〇月二日夕刊)も普段はほとんど使われないことばで、通常は無徴の「神」が男性をあらわす場合が多いが、ここでは「男」冠詞つきで表現されていた。

三紙別では朝日が「男」冠詞を九件使用しており、毎日一件、読売二件を大きく上回っ

表5 男性冠詞「男」のつくことば

(単位：件)

順位	表現	朝日	毎日	読売	合計
1	男児	8	0	2	10
2	男神	1	0	0	1
	男エイリアン	0	1	0	1
合計		9	1	2	12

表6 男性冠詞“男性”のつくことば (単位：件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	男性教諭	2	2	9	13
2	男性職員	3	1	8	12
	男性会社員	2	7	3	12
4	男性社員	1	4	1	6
	男性教員	0	3	3	6
6	男性客	3	0	0	3
	男性運転手	1	2	0	3
	男性店員	0	2	1	3
9	男性歌人	2	0	0	2
	男性患者	2	0	0	2
	男性従業員	2	0	0	2
	男性キャスター	0	0	2	2
13	男性ランナー	1	0	0	1
	男性顧客	1	0	0	1
	男性読者	1	0	0	1
	男性編集者	1	0	0	1
	男性アイドルグループ	0	1	0	1
	男性ガードランナー	0	1	0	1
	男性スタッフ	0	1	0	1
	男性管理職	0	1	0	1
	男性局員	0	1	0	1
	男性主治医	0	1	0	1
	男性助産士	0	1	0	1
	男性副検事	0	1	0	1
	男性アルバイト店員	0	0	1	1
	男性課長	0	0	1	1
	男性記者	0	0	1	1
男性研究者	0	0	1	1	
男性清掃員	0	0	1	1	
合 計		22	29	32	83

次に、「男性」がかんむりにつくことばは、表6にみるように、「男性教諭」の一三件を最多に、「男性会社員」「男性職員」各一二件が続ぎ、合計二九種類、八三件カウントされた。「男性助産士」などは、これまで女性の領域

た。

とされてきた職業に男性が参入することで、男性が有徴化されて表現されたケースと言えよう。朝日が二・三件とやや少なく、毎日と読売でそれぞれ二・九件、三・三件となった。

第三に、「男子」がかんわりにつくことばは、表 7 にみるように、「男子生徒」の二・一件が最も多く、「男子選手」三件、「男子高校生」「男子児童」各二件など、合計七種類、二・一件であった。三紙別では、各紙ほぼ同頻度で出現しており、朝日で六件、毎日で七件、読売で八件みられた。

これら男性冠詞は、期間中三紙合計で一・一六件数えられた。一日で朝・夕刊合わせて一紙あたり平均二・六件使われていた計算となる。女性冠詞に比べ、出現頻度は三分の一以下で、ずいぶんと少ないことがわかる。三紙別に男性冠詞の一日平均使用回数を見ると、朝日で二・五件、毎日で二・五件、読売で二・八件とほぼ同頻度であった。なお、女性冠詞にみられた「女流」に対応する、「男流」という表現は一件もみられなかった(ただし、一九九一年の分析時には、「男流作家」という形で一件だけ使用されていた)。「女流」は、もう一方のジェンダーに対して平行的な語彙がない片面的なことばの典型例と言えよう。

(3) 女性冠詞と男性冠詞の出現頻度にみられるアンバランス

次に、期間中の三紙合計の全性別冠詞に対する「女性冠詞」「男性冠詞」

表 7 男性冠詞“男子”のつくことば

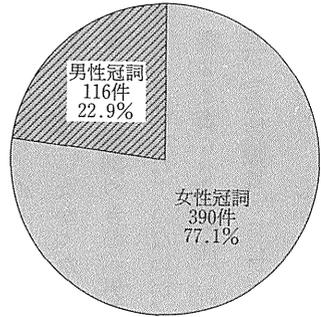
(単位：件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	男子生徒	3	6	2	11
2	男子選手	1	0	2	3
3	男子高校生	2	0	0	2
	男子児童	0	0	2	2
5	男子留学生	0	1	0	1
	男子学生	0	0	1	1
	男子大学生	0	0	1	1
	合 計	6	7	8	21

(4) 女性冠詞・男性冠詞がつく語の種類にみられる非対称性
次に、女性冠詞および男性冠詞がつけられたことばの種類を比較してみよう。表8からわかるように、「女性冠詞」が冠せられてい

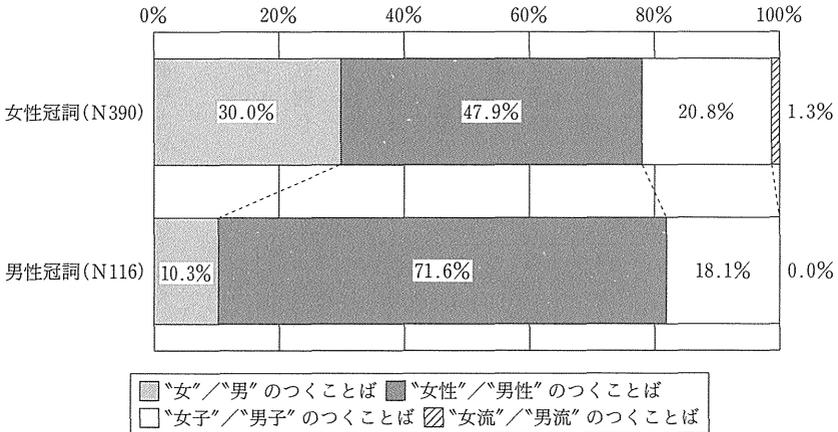
る一方、「男」「男子」は一〜二割にとどまっている。これに対し女性には、「女性」をかんむりにつけたことばで表現されることが最も多いものの、それは半数弱にとどまり、「女」や「女子」も二〜三割と、一定の割合で使用されている。

グラフ1 性別冠詞の女男比 (3紙合計)



の出現頻度を示したのがグラフ1である。五〇六件の全性別冠詞中、「女性冠詞」は三九〇件、七七・一％であるのに対し、「男性冠詞」は一一六件、二二・九％で、およそ三対一の出現比率であった。

グラフ2 性別冠詞の内訳比率 (3紙合計)



る職業名等の語の種類は「女」で一七種類、「女性」で七六種類、「女子」で一四種類、「女流」で四種類、「婦人」で一種類と、計一二種類みられた。それに対して「男性冠詞」がかぶせられたことばの種類は「男」三種類、「男性」二九種類、「男子」七種類で、計三九種類となり、女性冠詞のつくことば数は男性冠詞のつくことば数の約三倍となっている。「女性冠詞」は「男性冠詞」よりも紙面で使用される頻度が高いというだけでなく、それがつけられることばも多岐にわたっているのである。

具体的な語をみながら比較してみると、まず表1と表5の「女」「男」冠詞については、「女児」に対して「男児」がみられるほか、先にもふれたように「女神」に対して「男神」、「女エイリアン」に対し「男エイリアン」というように、対応する表現が存在する。しかしながら、「女」冠詞と「男」冠詞の双方が冠せられたことばは今述べた三種類だけで、あとは全て「女冠詞」つきのことばであった。たとえば、今回「女」冠詞つきの語の第一位で六七件を数えた「女優」の対語とみなされる「男優」は、時折メディアで目にする呼称であり、辞書にも載っていることばであるが、今回調査した紙面には一件も用いられていなかった。また、出現頻度の高い「女王」「女医」「女主人公」等に対応する「男」冠詞つきの「男王」「男医」「男主人」「男主人公」といったことばは、普段もほとんど使われていないが、今回の調査でも皆無であった。

次に、表2と表6で「女性」冠詞と「男性」冠詞をみてみると、「女性記者」には「男性記者」、「女性職員」には「男性職員」、「女性社員」には「男性社員」など、一八種類が対応している。しかしながら、「女性」冠詞つきの五八種類、「男性」冠詞つきの

表 8 女性冠詞および男性冠詞がつく語の種類

女性冠詞がつく語の種類		男性冠詞がつく語の種類	
女	17	男	3
女性	76	男性	29
女子	14	男子	7
女流	4	男流	0
婦人	1		
合 計	112	合 計	39

一「種類のことばについては、対応する表現はみられなかった。たとえば、「女性作家」「女性監督」「女性社長」「女性職人」はあるのに、「男性作家」「男性監督」「男性社長」「男性職人」という表現は出てこない。また対応する表現があった「記者」などのことばにしても、「女性」冠詞がつく場合(二三件)の方が「男性」冠詞がつく場合(一件)よりも出現頻度が圧倒的に高い。

ここから、専門的な分野の職業に関しては、今もって男性が就くことが暗黙の前提となつてることが示唆される。したがって、その分、女性の専門家に対しては女性冠詞がかぶせられることになり、それが「女性」がかんむりにつくことばの種類を、女性冠詞の出現頻度と同様に増やしている。それに対して、「男性助産士」は、先にも述べたように女性領域の職とされてきた経緯から、男性が有徴性を帯びたことばだが、こうしたことばはごくわずかである。

表3と表7から、「女子」「男子」冠詞についてみても、事情は同じである。「女子生徒」には「男子生徒」、「女子高校生」には「男子高校生」、「女子学生」には「男子学生」、「女子児童」には「男子児童」の四種類が対応している。ただし、出現頻度は「児童」を除いて「女子」冠詞つきのものの方が高く、「男子」冠詞つきの語の二〜四倍に達している。女性は、生徒・学生といったごく若い時期から、すでにより有徴化されやすい存在とされているのである。

一方、それぞれ対応する表現がみられなかった性別冠詞つきの表現は、「女子」の一〇種類に対して「男子」は三種類で、「女子」冠詞つきの表現がより頻繁に出現している。たとえば、「女子アナ」「女子主将」「女子工具」「女子プロ」に対応する「男子アナ」「男子主将」「男子工具」「男子プロ」などのことばは、新聞紙面上で全くみられないのである。

このように、「女性冠詞」つきのことばの種類のは多さは、それに対応する「男性冠詞」使用の少なさに特徴づけられているといえることができる。つまり、男性については、「男性冠詞」を用いなくとも職業名さえ記せばそれを冠せられた人物が男性であることが想定され、それとは逆に、女性の場合、「女性冠詞」を用いることで、その人物が女性であることが特定可能になるという了解が、暗黙のうちにできあがっているのである。

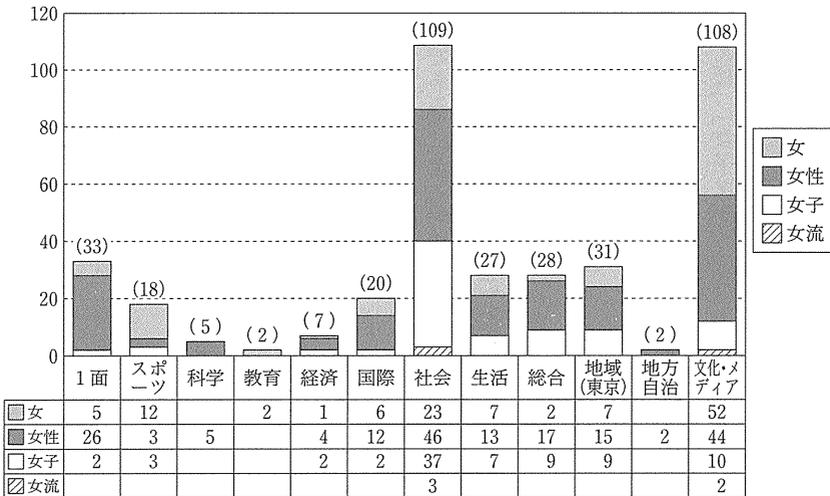
(5) 紙面別にみた性別冠詞の出現頻度

今回、これまで数回にわたって行ってきたジェンダー表現の量的分析としては初めての試みとして、面立て別の分析を行ってみた。

三紙の紙面を「1面」「スポーツ」「科学」「教育」「経済」「国際」「社会」「生活」「総合」「地域(東京)」「地方自治」「文化・メディア」の一二の面に分けて女性冠詞の種類別頻度を出したところ、グラフ3のようになった。

「女性冠詞」全体(全三九〇件)では、「社会」面における

グラフ3 紙面別女性冠詞の使用件数(3紙合計)(単位:件)



※ グラフの()内は合計

女性冠詞使用が最多で一〇九件(二七・九%)、ほとんど同列で「文化・メディア」面が一〇八件(二七・七%)、以下、「一面」「地域(東京)」「生活」「総合」の各面が続いた。四種類の冠詞ごとにとみると、「社会」面では「女性」と「女子」が多く、「文化・メディア」面では「女」と「女性」が多くなっていることがわかる。「女流」は両面ともにみられた。また、「一面」において「女性」の、「スポーツ」面において「女」の使用がそれぞれ目立つ。

「社会」面において四六件にのぼる「女性」が、かんむりにつくことばは「女性従業員」五件、「女性職員」五件、「女性検事」五件などがその代表的なものである。また、三七件みられた「女子」が、かんむりにつくことばは、「女子生徒」一九件が圧倒的で、次いで「女子高生」六件、「女子短大生」五件が目立った。このように、社会面では、女性の会社員と女子の生徒が、有徴化される傾向が強くみられる。

「文化・メディア」面では、「女」が、かんむりにつくことばが、女性冠詞の半数近い五二件を占めている。その中で出現頻度が最も高かったのは「女優」の三八件で、次は「女王」の五件であった。また、四四件みられた「女性」が、かんむりにつくことばのうち最も多かったのは「女性作家」の二一件、それに「女性監督」七件などが続いた。「三面記事」と呼ばれることもある社会面記事とともに、メディアや文化の領域で、やはり女性たちが有徴化されていることがよくわかる結果と言えるよう。

同様に、男性冠詞の種類別頻度を示したのがグラフ4である。「男性冠詞」全体(全二一六件)では、女性冠詞同様「社会」面でもっとも使われる頻度が高く、六一件(五二・六%)に達し、次いで「地域(東京)」面一九件(一六・三%)、以下「文化・メディア」「生活」の各面が続いた。「教育」と「スポーツ」を除くほとんどの面で、「男性」が、かんむりにつくことばが最も多く使われている。事件ネタが多く他の面に比べよりセンセーショナルな報道が行われやすい社会面では、女性ほどではないにしても、男性もまたその性を強調される傾向がみて取れよ

う。

その「社会」面で四一件を占める「男性」のつくことばの内訳は、「男性教諭」が最も多く一〇件、次いで「男性職員」七件、「男性会社員」五件となっている。「地域（東京）」面では、「男性会社員」七件、「男性教員」六件が多かった。

(6) 性別冠詞の経年変化——男性冠詞の増加と

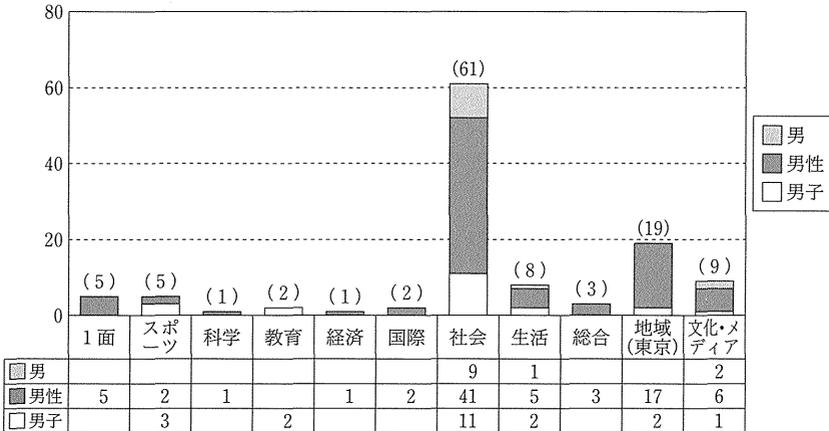
「女性」冠詞・「男性」冠詞への収斂

本調査は、既に述べたように一九八五年から開始され、九一年、九六年と五年おきに、過去三回分のデータをもつ。第四回目にあたる今回のデータとこれまでの調査結果を比較しながら、女性冠詞・男性冠詞の使用頻度の傾向と変化をみてみよう。

まず、女性冠詞の種類別件数の推移を示したのがグラフ5である。女性冠詞の総数は八五年四二六件、九一年三三七件、九六年四三二件、二〇〇一年三九〇件と推移してきており、目にみえて女性冠詞の使用量が減っていると断言できるほどではない。

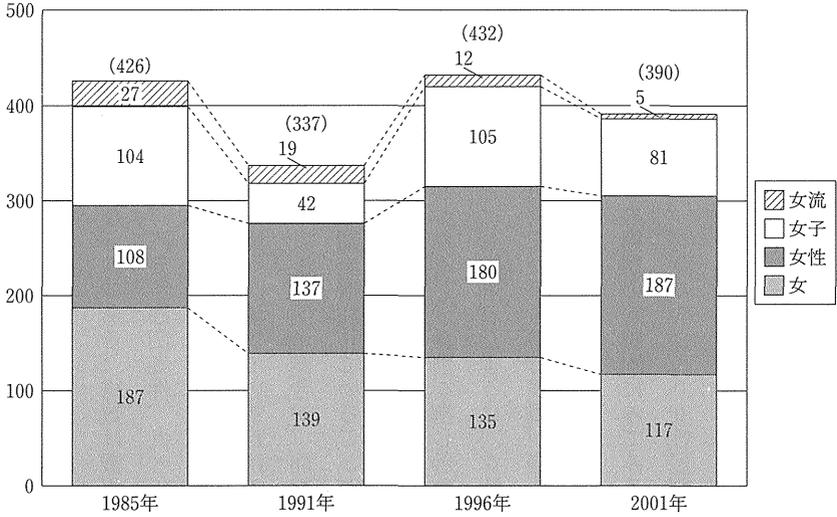
一方、グラフ6により男性冠詞の総数をみると、八五年二三件、九一年四九件、九六年八〇件、二〇〇一年一一六件と、はっ

グラフ4 紙面別男性冠詞の使用件数（3紙合計）（単位：件）



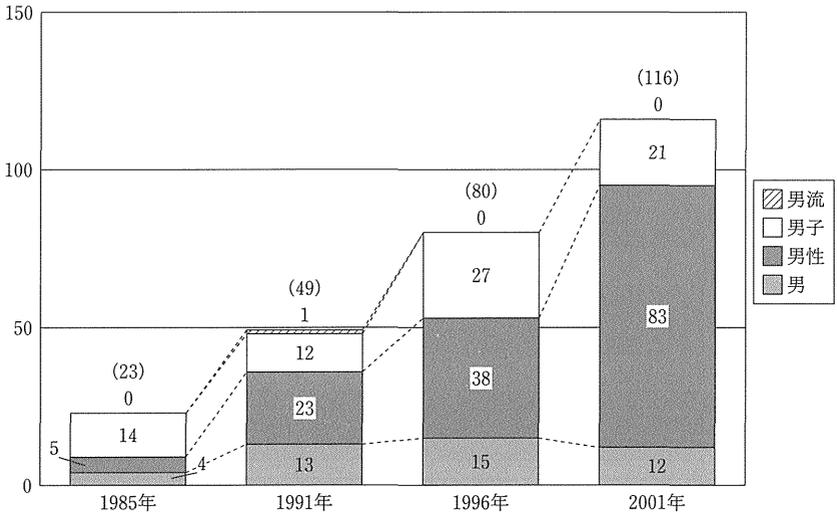
※ グラフの () 内は合計

グラフ 5 女性冠詞の経年比較 (単位: 件)



※ グラフの () 内は合計

グラフ 6 男性冠詞の経年比較 (単位: 件)



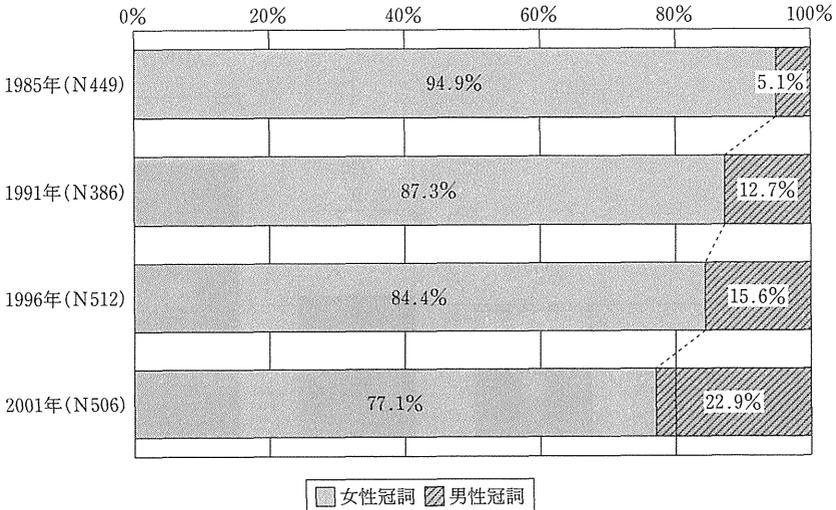
※ グラフの () 内は合計

きりと増加していることがわかる。

グラフ7は、性別冠詞全体に対する女性冠詞・男性冠詞の件数比率の推移を示したものである。総数は調査年によって多少のばらつきがあり、八五年四四九件、九一年三八六件、九六年五一二件、二〇〇一年五〇六件というように、必ずしも性別をあたまたにつける傾向が減っているわけではないが、当初は九割を超えていた女性冠詞の割合が、回数を追うごとに減少し、その分男性冠詞が増加していることがきれいにあらわれている。この女性冠詞比率の減少傾向と男性冠詞比率の増加傾向のデータからみると、性別を指し示す冠詞は減ってはいるものの、先にも指摘したように、女性冠詞をつける場合には男性にも冠詞をつける平行表現が増えていると言えそうである。

また、性別冠詞をその種類の内訳別にみると、多少の変化があらわれている。グラフ5により女性冠詞の種類の内訳の推移をみると、「女」のつく語が減少傾向を示し、「女性」のつく語が増加するトレンドにある。「女子」は増減を繰り返してよくわからないが、「女流」は明らかに減少

グラフ7 女男性冠詞の経年比較 (3紙合計)



傾向にあると言つてよい。また、男性冠詞に関しては、グラフ6に示されているように、「男性」のつく語の増加が著しく、八五年五件、九一年二件、九五年三八件、二〇〇一年八三件と、調査年を追うごとに増えている。

性別冠詞を種類別に見渡した結果は、総じて、「女」および「女流」冠詞が減り、「女性」および「男性」冠詞が増えていると言え、性別冠詞は「女性」と「男性」をあたまたにつける表現に収斂しつつあるように見受けられる。

表9以降には、四種類の女性冠詞ごとにそれらがつくことばを各調査年ごとに上位一〇位まで並べてみた。これによると、まず女性冠詞のうち表9に示された「女」のつく語は、毎回「女優」が過半数を占め、「女王」がそれに次いでおり、この二つが一貫して女性冠詞のつく頻度の高いことばとして使用されていることがわかる。また「女兒」「女神」にも根強いものがある。

次に、表10に示した「女性」のつく語には、継続的に上位を占める語はみられず、順位が入れ替わっている。どうもその時々的事件・事故やイッシューに左右されて使われる傾向があるようだ。しかしながら、「女性職員」「女性(会)社員」「女性作家」「女性(国会)議員」などは、コンス

表9 女性冠詞「女」がつくことばの上位10位の経年比較

1985年		1991年		1996年		2001年					
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率				
1	女優	111	61.7%	1	女優	77	55.4%	1	女優	67	57.3%
2	女王	18	10.0%	2	女王	18	12.9%	2	女王	17	14.5%
3	女生徒	8	4.4%	3	女神	8	5.8%	3	女兒	8	6.8%
4	女教師	5	2.8%	4	女兒	8	5.8%	4	女座長	6	5.1%
5	女銀行家	4	2.2%	5	女医	5	3.6%	5	女主人公	3	2.6%
	女主人	4	2.2%	6	女スパイ	4	2.9%	3	女生徒	3	2.6%
	女帝	4	2.2%	7	女主人	3	2.2%	7	女帝	2	1.7%
	女神	4	2.2%		女講師	3	2.2%		女主人公	2	1.7%
9	女医	3	1.7%	9	女帝	2	1.4%	9	女武者	1	0.9%
10	女高生	2	1.1%		女友達	2	1.4%		女店主	1	0.9%
	ほか2語				ほか1語				ほか7語		

タントに使用されている。

表11の「女子」のつく語も調査時期によって変動がみられ八五年は「女子中学生」がトップであったのが九一年は「女子大生」が一位となり、九六年には「女子高生・女子高校生」が大幅増となっている。二〇〇一年は「女子生徒」が四割を占め、具体的に学齢がわかる語は減っている。しかしながら高校生、中学生、大学生、または学生、生徒に「女子」のかんわりがつくケースが常に上位を占める点では変わりがない。

表12の「女流」のつくことばは、「女流作家」が九六年から姿を消し、かなり限られた領域の技芸を専門にする人びとに用いられるだけになっ

表 10 女性冠詞「女性」がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
1	女性秘書	5	5.0%	1	女性作家	9	6.6%	1	女性候補(者)	19	10.6%	1	女性記者	23	12.3%
2	女性議長	3	3.0%	2	女性職員	7	5.1%	2	女性議員	17	9.4%	2	女性職員	17	9.1%
	女性国会議員	3	3.0%	3	女性大使	6	4.4%	3	女性詩人	11	6.1%	3	女性社員	14	7.5%
	女性政治家	3	3.0%	4	女性議員	5	3.6%	4	女性会社員	8	4.4%	4	女性作家	13	7.0%
	女性留学生	3	3.0%		女性市長	5	3.6%	5	女性監督	7	3.9%	5	女性従業員	8	4.3%
6	女性委員長	2	2.0%	6	女性ファン	4	2.9%		女性技術者	7	3.9%	6	女性監督	7	3.7%
	女性大臣	2	2.0%		女性労働者	4	2.9%	7	女性職員	6	3.3%	7	女性店員	5	2.7%
	女性党員	2	2.0%	8	女性社員	3	2.2%		女性作家	6	3.3%		女性検事	5	2.7%
	女性研究者	2	2.0%		女性リポーター	3	2.2%		女性立候補	6	3.3%	9	女性患者	4	2.1%
	女性前衛芸術家	2	2.0%		女性客	3	2.2%	10	女性社員	4	2.2%		女性歌手	4	2.1%
	ほか18語				ほか7語				ほか3語						

表 11 女性冠詞「女子」がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
1	女子中学生	29	30.5%	1	女子大生	11	26.2%	1	女子高生	41	39.0%	1	女子生徒	33	40.7%
2	女子大生	13	13.7%	2	女子学生	7	16.7%	2	女子高校生	12	11.4%	2	女子高生	13	16.0%
3	女子学生	10	10.5%	3	女子職員	4	9.5%	3	女子学生	10	9.5%	3	女子中学生	7	8.6%
4	女子生徒	8	8.4%	4	女子高生	3	7.1%	4	女子生徒	9	8.6%	4	女子大生	6	7.4%
5	女子高生	5	5.3%	5	女子行員	3	7.1%	5	女子中高生	8	7.6%	5	女子短大生	5	6.2%
6	女子高校生	4	4.2%		女子労働者	3	7.1%	6	女子大生	6	5.7%	6	女子高校生	4	4.9%
7	女子職員	3	3.2%	7	女子社員	2	4.8%		女子中学生	6	5.7%		女子学生	4	4.9%
	女子社員	3	3.2%		女子留学生	2	4.8%	8	女子大生社長	5	4.8%	8	女子アナ	3	3.7%
9	女子中学3年生	2	2.1%	9	女子生徒	1	2.4%	9	女子児童	3	2.9%	9	女子中生	1	1.2%
	女子留学生	2	2.1%		女子高校生	1	2.4%	10	女子社員	2	1.9%		女子プロ	1	1.2%
	ほか18語				ほか5語								ほか4語		

表 12 女性冠詞“女流”がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
1	女流作家	12	44.4%	1	女流作家	10	52.6%	1	女流棋士	5	41.7%	1	女流日本画家	2	40.0%
2	女流本因坊	3	11.1%	2	女流陶芸家	4	21.1%	2	女流作曲家	2	16.7%	2	女流書画家	1	20.0%
3	女流音楽家	2	7.4%	3	女流棋士	2	10.5%		女流本因坊	2	16.7%		女流詩人	1	20.0%
4	女流演出家	1	3.7%	4	女流画家	1	5.3%	4	女流奏者	1	8.3%		女流棋士	1	20.0%
	女流画家	1	3.7%		女流生け花作家	1	5.3%		女流詩人	1	8.3%				
	女流建築家	1	3.7%		女流かな書道家	1	5.3%		女流四冠王	1	8.3%				
	女流史家	1	3.7%												
	女流デザイナー	1	3.7%												
	女流陶芸家	1	3.7%												
	女流バイオリニスト	1	3.7%												
	ほか3語														

表 13 女性冠詞“婦人”がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
	(データなし)			1	婦人警察官	7	58.3%	1	婦人客	1	100.0%	1	婦人警官	1	100.0%
				2	婦人議員	3	25.0%								
				3	婦人記者	1	8.3%								
					婦人相談員	1	8.3%								

表 14 男性冠詞“男”がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
	(データなし)			1	男児	8	61.5%	1	男児	9	60.0%	1	男児	10	83.3%
				2	男友達	4	30.8%	2	男優	6	40.0%	2	男エイリアン	1	8.3%
				3	男優	1	7.7%						男神	1	8.3%

表 15 男性冠詞“男性”がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
	(データなし)			1	男性教諭	3	13.0%	1	男性会社員	12	31.6%	1	男性教諭	13	15.7%
				2	男性社員	2	8.7%	2	男性患者	3	7.9%	2	男性会社員	12	14.5%
					男性経営者	2	8.7%	3	男性従業員	2	5.3%		男性職員	12	14.5%
					男性歌手	2	8.7%		男性会員	2	5.3%	4	男性教員	6	7.2%
				5	男性職員	1	4.3%		男性候補	2	5.3%		男性社員	6	7.2%
					男性弁護士	1	4.3%	6	男性社員	1	2.6%	6	男性運転手	3	3.6%
					男性講師	1	4.3%		男性カメラマン	1	2.6%		男性客	3	3.6%
					男性アイドル歌手	1	4.3%		男性同性愛者	1	2.6%		男性店員	3	3.6%
					男性ポップミュージシャン	1	4.3%		男性容疑者	1	2.6%	9	男性キャスター	2	2.4%
					男性ダンサー	1	4.3%		男性アルバイト	1	2.6%		男性歌人	2	2.4%
					ほか8語				ほか12語				ほか19語		

てきたことがうかがえる。なお、これまでのグラフからは除いてきたが、表13に示した「婦人」がかんむりにつくことばは、もはや「死語」に近くなつていると言えるだろう。

同様に、男性冠詞の上位をみてみると、表14に示された「男」のつく語は、毎回「男児」が一位で六〇八割を占めている。また、表15に示された「男性」のつく語は年によって多少の変動がみられるが、「男性教諭」「男性会社員」は上位の「常連」と言える。表16に示された「男子」のつく語では、「男子生徒」が常に五〇六割を占め、ここでもまた学生や生徒に冠せられる傾向が強い。

2 ジェンダーを含み込んだ職業語の無自覚的使用

(1) 日常的に使われている女性の性を含み込んだ職業語

新聞には、1でみた「女性冠詞」の多用のほかにも、女性の性別役割を強調する表現やことばが日常的に用いられている。その一つが、ある職業に女性が就くことを自明として、あらかじめ性別を組み込んだ職業名を日常的な紙面づくりの中で使用するというものがある。まず、職や働き方をあらわすことばのうち、女性の性別を含

表 16 男性冠詞“男子”がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
(データなし)															
				1	男子生徒	8	66.7%	1	男子生徒	14	51.9%	1	男子生徒	11	52.4%
				2	男子学生	3	25.0%	2	男子高校生	6	22.2%	2	男子高校生	2	9.5%
				3	男子警察官	1	8.3%	3	男子監督	1	3.7%		男子児童	2	9.5%
									男子大学生	1	3.7%	4	男子選手	3	14.3%
									男子小学生	1	3.7%	5	男子学生	1	4.8%
									男子吹奏楽隊	1	3.7%		男子大学生	1	4.8%
									男子中学生	1	3.7%		男子留学生	1	4.8%
									男子高生	1	3.7%				
									男子学生	1	3.7%				

表 17 男性冠詞“男流”がつくことばの上位10位の経年比較

1985年				1991年				1996年				2001年			
順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率	順位	表現	件数	比率
(データなし)															
				1	男流作家	1	100.0%			0				0	

表 18 女性の性を含み込んだ職業語

(単位: 件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	看護婦	28	15	23	66
2	ホステス	7	3	1	11
3	ヒロイン	4	1	5	10
	OL	3	3	4	10
5	保健婦	3	0	6	9
6	慰安婦	6	1	0	7
7	助産婦	2	3	0	5
	ワンギャル	0	5	0	5
9	歌姫	1	2	1	4
	キャンペーンガール	0	4	0	4
	ママ	0	4	0	4
12	コギャル	3	0	0	3
	おかみ	2	1	0	3
	ウェイトレス	1	2	0	3
	マドンナ	0	3	0	3
	女中	0	3	0	3
	魔女	0	3	0	3
18	家政婦	1	1	0	2
	従軍慰安婦	0	2	0	2
20	ネクタイ娘	1	0	0	1
	バレリーナ	1	0	0	1
	マスコットガール	1	0	0	1
	マダム・ミニスター	1	0	0	1
	革女	1	0	0	1
	看板女性	1	0	0	1
	腰元	1	0	0	1
	産婆	1	0	0	1
	娼婦	1	0	0	1
	乳母	1	0	0	1
	遊女	1	0	0	1
	踊り子	1	0	0	1
	バットガール	1	0	0	1
	淑女	0	1	0	1
	キャリアウーマン	0	1	0	1
	キャンギャル	0	1	0	1
	ネクタイ姫	0	1	0	1
	パズルレディー	0	1	0	1
	メイド	0	1	0	1
	看板娘	0	1	0	1
婦長	0	1	0	1	
風俗嬢	0	1	0	1	
保母	0	1	0	1	
ミスグアム	0	0	1	1	
ミス中央区	0	0	1	1	
合 計		74	66	42	182

み込んだ語についてカウントし、その結果を表18に掲げた。

三紙合計でみると、「看護婦」の六六件を最多に、「ホステス」二一件、「OL」「ヒロイン」各一〇件、「保健婦」九件、「慰安婦」七件などが上位にあがっている。以下、「助産婦」「ワンギャル」「歌姫」「キャンペーンガール」「ママ」などが続く。

各紙別にみると、三紙ともに「看護婦」が最も多く、朝日で二八件、読売で二三件におよんだ。朝日では「ホステス」「慰安婦」がそれに続く。毎日では、「ワンギャル」「キャンペンガール」「ママ」などが多くみられ、「保健婦」や「慰安婦」はほとんど見受けられない。また読売では「保健婦」が六件数えられたが、「慰安婦」「助産婦」はみられなかった。

女性の性別を含み込んだ語の合計数は朝日、毎日では七〇件前後であったのに対し、読売は四二件と、他二紙に比べて少なく、三紙を合計すると一八二件となった。一日に一紙当たり平均四・〇件(朝・夕刊含む)使われていた計算になる。

これらのことばを大別すると、ケアやサービスを提供する仕事の名称、女性の性に関連した仕事の名称や戦時性奴隷とされた性暴力被害者の呼称、また英語の *girl* や *girl* や *girl* など、女性を表す接尾語 *girl* がつけられることよって女性職であることが表示される職業名などに分かれる。中でも「看護婦」や「保健婦」「助産婦」などは、女性の職業名として日常的に用いられていることばであるが、新聞紙面上で多用されることにより、これらの職業が女性の性別とことさらに結びつけられて、多くの人びとに記憶されるのを助長する恐れをばらんでいる。「看護婦」という呼称は、後述の一九九九年男女雇用機会均等法改正に伴い、求人広告などで「看護婦・看護師」と女男セットで掲示されるようになった。さらに、調査年でもある二〇〇一年に、それまでの保健婦助産婦看護婦法が保健師助産師看護師法に改正された。それに伴い「看護婦・看護師」は、二〇〇二年三月から女男同一名称の「看護師」へと変更され、同時に「保健婦・保健士」も女男双方を含む「保健師」というジェンダー・ニュートラルな名称に統一された。なお「助産婦」も、現在では「助産師」と中性名称になっているが、この職に就けるのは今のところ女性だけである。

女男を含めた雇用者を表すことばとしては「会社員」があるが、女性に対しては、今回三位だった「OL」ということばが、後出の経年比較データにも示されているように、男性の会社員をあらわす「サラリーマン」とともに、新聞の中で根強く使われ続けている。「OL」という語に関しては、若くて独身、結婚願望が強く腰掛け的、責任のない九時五時勤務の平社員で遊ぶことが好き、といったイメージが流布している点は否めないだろう。たとえば、3で述べる、国学院大学の「社会学」受講生を対象にした「サラリーマン」と「OL」に関するアンケート調査における「OL」ということばから受けるイメージについての自由記述回答には、「かわいい、受付、合コン」「若いお姉さん」「オフィス街で昼に財布を片手にお弁当を買いに行く女性」「大学を出て結婚をするまで腰掛け程度に働く女性」「制服を着て働く女性」「給湯室、おしゃべり」「未婚の若い女性でコピーやお茶汲みをしている」「働いている女性で重役にはついていない」「シヨムニ(フジテレビ系)の江角マキコの役」などといった回答が寄せられている⁽⁷⁾。恐らくこれらは、一般社会におけるOLイメージに準ずるものだろう。

紙面上で「OL」が「サラリーマン」の対語として頻繁に用いられることにより、男性とは異なった女性の働き方に関するステレオタイプなイメージが補強され、再生産され続けていく可能性がある⁽⁸⁾。

その他、「保母」という語は、一九九七年の児童福祉法の改正により、男女共に「保育士」に統一されたのだが、今回の調査においては、一件登場している。これもまた、育児は女性がするものであるという価値観を形成し、固定化する危険性をはらむ語である。

一九九九年に男女雇用機会均等法が改正され、求人情報等では女性のみをあらわす職業名や男性のみをあらわす職業名は、雇用の機会を性によって排除するという趣旨から違法となった。したがって、女性のみをあらわす「ホステス」「ウェイトレス」「家政婦」といった職業名や、男性が就く職として連想されてしまう「スポーツスマ

ン」「カメラマン」「営業マン」「セールスマン」といった職業名は、求人メディアでは使用不可となった。女性と新聞メディア研究会は、九九年一〇月に、改正均等法後の朝日・毎日・読売三紙の求人欄を分析しているが、調査日のサンプル紙における求人広告約二〇〇件中、「看護婦」「正准看護婦」の二件以外には、職業名の違反表示はなかったことを確認している。⁽⁹⁾新聞は、求人欄にとどまらず、ほかの各面の記事の中でも、改正均等法にのっとった使用法を遵守することにより、人びとの職業をめぐるジェンダー意識の変化をうながしていくことが必要である。

(2) 男性の性を含み込んだ職業語と女性の排除

女性の性を含み込んだ職業名と対置される、男性の性を含み込んだ職業名の使用頻度は、表19の通りである。

三紙合計の筆頭は、「サラリーマン」の四三件で、それに次いで「スポークスマン」が三〇件にのぼった。後者は調査期間中に米・同時多発テロ関連記事が多かったことを反映している。以下「カメラマン」「ビジネスマン」「ヒーロー」「営業マン」などの語が続ぎ、男性の性を含み込んだ職業語は全体で二一八件使用されていた。「サラリーマン」の使用頻度は朝日が一九件で最多であり、読売も一五件使用していた。また、朝日と毎日では「スポークスマン」も多く使われており、中でも毎日は「サラリーマン」を上回る使用頻度であった。また朝日で「営業マン」「車夫」が目立つ。

これら男性の性を含み込んだ職業名の各紙別合計をみると、朝日が一〇七件と非常に多く、毎日の六一件、読売五〇件を大きく引き離している。三紙を平均すると一日当たり一紙で四・八件使われている計算になる。

表19からも明らかのように、男性の性別を含みこんだ職業名には、「マン」という「接尾語」がつくものが多く、

表 19 男性の性を含み込んだ職業語

(単位:件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	サラリーマン	19	9	15	43
2	スポークスマン	13	13	4	30
3	カメラマン	7	6	6	19
4	ビジネスマン	5	3	9	17
5	ヒーロー	8	5	3	16
6	営業マン	10	1	0	11
7	車夫	6	0	0	6
	スポーツマン	1	1	4	6
9	英雄	4	0	0	4
	セールスマン	3	0	1	4
	OB	1	3	0	4
12	ガードマン	2	0	1	3
	キーマン	0	3	0	3
	商社マン	0	1	2	3
15	サムライ	2	0	0	2
	ヒットマン	2	0	0	2
	ホスト	2	0	0	2
	剣闘士	2	0	0	2
	侍	2	0	0	2
	狼男	2	0	0	2
	看護士	1	1	0	2
	リードオフマン	1	0	1	2
	貴公子	1	0	1	2
	証券マン	1	0	1	2
	バットボーイ	0	2	0	2
	フリーカメラマン	0	2	0	2
	紳士	0	1	1	2
29	4 回戦ボーイ	1	0	0	1
	アイディアマン	1	0	0	1
	オンブズマン	1	0	0	1
	ガンマン	1	0	0	1
	ジャズマン	1	0	0	1
	スタントマン	1	0	0	1
	マスター	1	0	0	1
	山男	1	0	0	1
	宣伝マン	1	0	0	1
	畜男	1	0	0	1
	武士	1	0	0	1
	幕内力士	1	0	0	1
	Gメン	0	1	0	1
	アンカーマン	0	1	0	1
	ウェーター	0	1	0	1
	スーパーマン	0	1	0	1
	チェアマン	0	1	0	1
	プレーボーイ	0	1	0	1
	ホテルマン	0	1	0	1
	金融マン	0	1	0	1
	准看護士	0	1	0	1
	暴走バイク野郎	0	1	0	1
	ラインマン	0	0	1	1
	合 計	107	61	50	218

特に、ビジネスやスポーツの分野に関連した語が目立っている。また、女性の場合とは異なり、ケア、サービス、セクシュアリティなどを強く感じさせる職業名はほとんどない。

これらの職業名は、人びとが日常生活の中で何気なく使っているものが多いが、新聞がそれらのことばを吟味することなしに使用し続けることによって、ジェンダー・バイアスのかかった職業観を流布させてしまう可能性は小

さくない。「サラリーマン」「スポークスマン」「カメラマン」など、男性を意味する「マン」の接尾辞をつけた職業名は、無意識のうちに読み手に男性主体を想起させてしまい、女性を排除する方向に作用しがちであることは、すでにフェミニズム言語学等により指摘されているところである。⁽¹⁰⁾

特に前回に引き続き今回の調査でも第一位を占めた「サラリーマン」ということばの場合、男性の勤め人の意味で使われるだけでなく、年金や税制など、私たちの生活にとってきわめて重要な記事の中で、雇用されて働く人の総称として使用されることが多い。後に3であらためて論じるように、この男性イメージを色濃く投影したことが、そのことへの自覚なしに使われることにより、年金や税制問題の当事者として暗黙のうちに男性が想定され、女性の存在がそれらの議論から抜け落ちてしまいかねないのである。

先に紹介した国学院大学におけるアンケート調査結果では、「OL」ということばと同様、「サラリーマン」ということばから受け取るイメージも訊ねているが、回答には、「中年の男性」「ごく普通の中堅会社に勤める男性会社員」「七三しちさん、メガネにスーツのおじさん」「家族のために働く男性」「ルーチンワーク」「給料が安い」「家にも会社にも居場所がなさそう」などのイメージが並べられた。⁽¹¹⁾これらのイメージは明らかに男性を想定したものである。多くの学生にとって「サラリーマン」は、やはり男性＝マンなのである。⁽¹²⁾

前述のように、「マン」の付く職業名の使用は、改正雇用機会均等法上違法なはずである。にもかかわらず新聞は、求人広告以外の記事の中では、何も問題がないかのようには、「マン」のつくことばを使い続けているのである。一方において、先に考察した女性の性を含む職業名も、それらの職域への男性の進出を阻害するという点では、男性の性を含み込む職業名と同様の問題をはらんでいる点を見逃してはなるまい。

(3) 経年比較からみる職業語——「看護婦」「OL」と

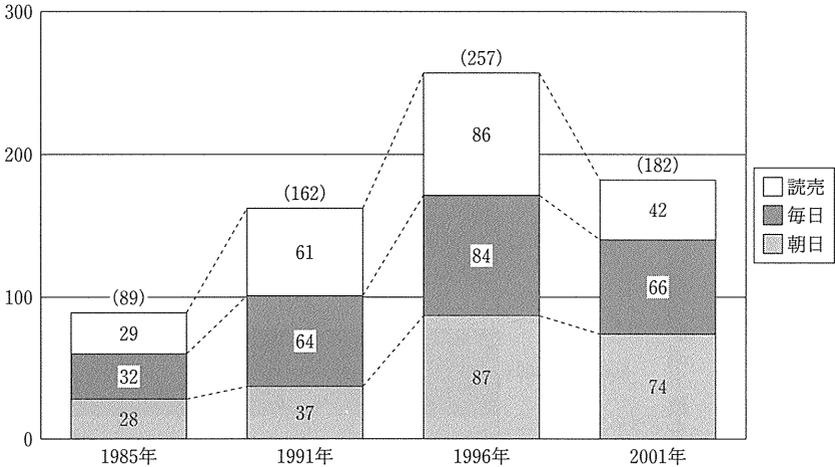
「サフリーマン」の根強さ

グラフ8は、女性の性を含み込んだ職業名の件数に関する経年推移を示したものである。一九八五年は三紙合計で八九件、九一年は一六二件、九六年は二五七件と年ごとに増加傾向を示していたが、二〇〇一年には一八二件へと減じた。中でも読売の減少が目立っている。三紙を平均すると、前回の調査時には一日一紙あたり平均五・七件の頻度だったものが、今回は四・〇件となっている。

一方、男性の性を含み込んだ職業名件数の推移を示したのがグラフ9である。調査を開始した九一年は一一九件だったのに対し、九六年は三一四件と大幅に増えたが、二〇〇一年は二一八件に減じている。特に毎日の減少が著しい。三紙平均すると、一日一紙あたり前回は七・〇件だったものが、四・八件となった。

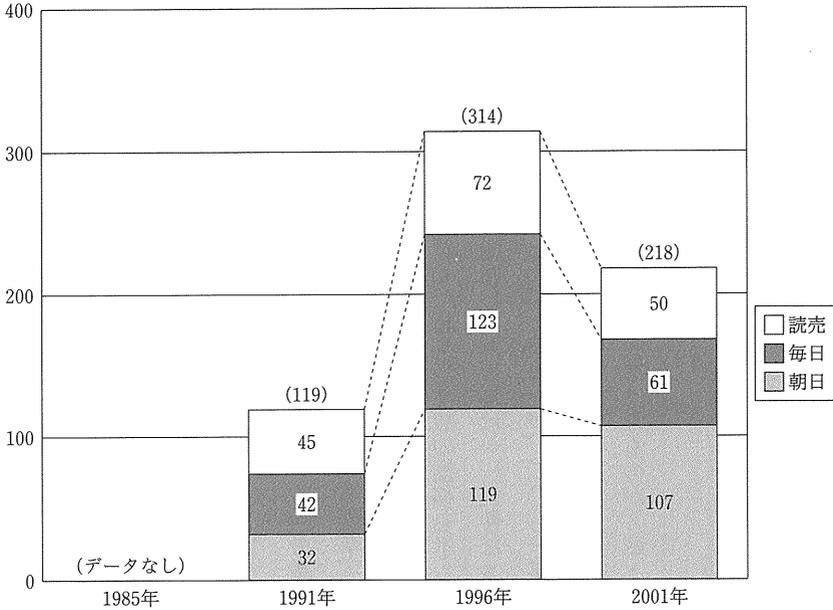
グラフ10は、性別を含み込んだ職業語全体の女男比率の経年変化をみたものである。九一年調査では女性の性を含み込んだ語が六割近くを占めていたが、九六年調査からはそれが逆転

グラフ8 女性の性を含み込んだ職業語の経年比較 (単位：件)



※ グラフの () 内は合計

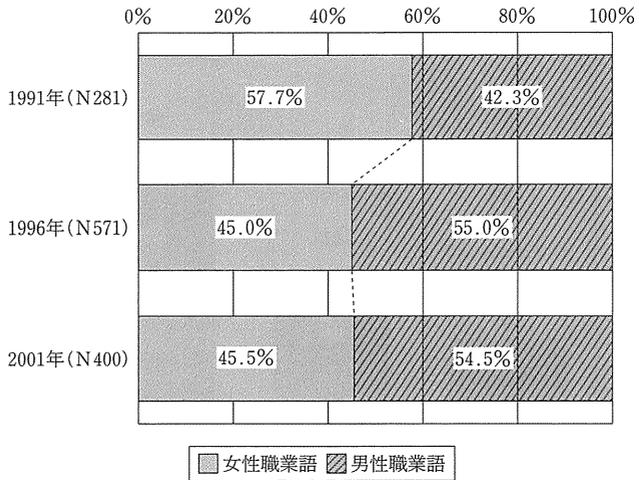
グラフ 9 男性の性を含み込んだ職業語の経年比較 (単位：件)



※ グラフの () 内は合計

し、男性の性を含み込んだ職業語が過半数を占める傾向が続いている。
 これまでの調査から上位のものだけを拾って変化をみると、女性に関する職業語は、表 20 に掲げ

グラフ 10 性別を含み込んだ職業語の女男比率経年比較 (3紙合計)



たように、八五年には「OL」が半数近くを占めていたが、それ以降は「看護婦」が一割から四割の間を推移しながら毎回一位となっている。また、「○○嬢」や「保母」という語は減っているが、「○○ガール」「○○レディ」「ホステス」には、根強いものがある。若さや華やかさ、そして風俗業に従事する性的存在であるなどのイメージが、女性にだけ付与されている実態にはあまり変化がないようだ。

表21は、男性に関する職業語の推移をみたものであるが、「サラリーマン」が常時

表 20 女性の性を含み込んだ職業語上位10位の経年比較

(単位：件)

1985年						1991年							
順位	表現	朝日	毎日	読売	合計	比率	順位	表現	朝日	毎日	読売	合計	比率
1	OL	15	17	11	43	48.3%	1	看護婦	2	18	17	37	22.8%
2	看護婦	1	2	3	6	6.7%	2	OL	8	14	13	35	21.6%
3	ホステス	2	1	2	5	5.6%	3	家政婦	0	1	8	9	5.6%
	保母	1	4	0	5	5.6%	4	娼婦	3	2	2	7	4.3%
5	家政婦	2	1	1	4	4.5%		芸者	3	2	2	7	4.3%
	キャリアウーマン	2	0	2	4	4.5%	6	保母	3	3	0	6	3.7%
7	秘書嬢	2	0	0	2	2.2%		乳母	2	3	1	6	3.7%
	ファーストレディ	1	0	1	2	2.2%	8	クラブのママ(又はママ)	5	0	0	5	3.1%
	モデル嬢	0	1	1	2	2.2%		海女	1	0	4	5	3.1%
	寮母	0	1	1	2	2.2%		商売女	0	0	5	5	3.1%

1996年						2001年							
順位	表現	朝日	毎日	読売	合計	比率	順位	表現	朝日	毎日	読売	合計	比率
1	看護婦	3	14	17	34	13.2%	1	看護婦	28	15	23	66	36.3%
2	(元)慰安婦	10	7	1	18	7.0%	2	ホステス	7	3	1	11	6.0%
	OL	10	3	5	18	7.0%	3	ヒロイン	4	1	5	10	5.5%
4	ヒロイン	6	9	1	16	6.2%		OL	3	3	4	10	5.5%
5	おかみ(さん)	4	0	11	15	5.8%	5	保健婦	3	0	6	9	4.9%
6	(元)従軍慰安婦	6	8	0	14	5.4%	6	慰安婦	6	1	0	7	3.8%
7	助産婦	1	2	10	13	5.1%	7	助産婦	2	3	0	5	2.7%
8	生保レディー	10	1	1	12	4.7%		ワンギャル	0	5	0	5	2.7%
9	娼婦	2	0	7	9	3.5%	9	キャンベーンガール	0	4	0	4	2.2%
10	スチュワーデス	2	3	3	8	3.1%		ママ	0	4	0	4	2.2%
	ほか3語							ほか1語					

表 21 男性の性を含み込んだ職業語上位10位の経年比較

(単位：件)

1991年							1996年						
順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計	比率	順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計	比率
1	証券マン	13	16	17	46	38.7%	1	サラリーマン	33	13	31	77	24.5%
2	サラリーマン	12	13	14	39	32.8%	2	OB	20	36	3	59	18.8%
3	カメラマン	1	6	3	10	8.4%	3	カメラマン	8	13	4	25	8.0%
4	商社マン	1	3	1	5	4.2%	4	ホスト	0	14	6	20	6.4%
5	ビジネスマン	0	1	2	3	2.5%	5	オンブズマン	5	8	6	19	6.1%
6	電通マン	0	3	0	3	2.5%	6	スポークスマン	11	3	1	15	4.8%
	ホスト	0	0	3	3	2.5%	7	神父	5	9	0	14	4.5%
8	下男	0	0	2	2	1.7%	8	ヒーロー	10	2	0	12	3.8%
	広報マン	0	0	2	2	1.7%	9	営業マン	0	4	5	9	2.9%
10	ジャズマン	1	0	0	1	0.8%	10	皇子	7	0	0	7	2.2%

2001年						
順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計	比率
1	サラリーマン	19	9	15	43	23.9%
2	スポークスマン	13	13	4	30	16.7%
3	カメラマン	7	6	6	19	10.6%
4	ビジネスマン	5	3	9	17	9.4%
5	ヒーロー	8	5	3	16	8.9%
6	営業マン	10	1	0	11	6.1%
7	車夫	6	0	0	6	3.3%
	スポーツマン	1	1	4	6	3.3%
9	セールスマン	3	0	1	4	2.2%
	OB	1	3	0	4	2.2%
	ほか1語					

※1985年はデータなし

表 22 記事中で使用されている「サラリーマン」の使われ方の経年比較

(単位：件)

記事における「サラリーマン」の意味	1996年				2001年			
	朝日	毎日	読売	合計	朝日	毎日	読売	合計
①明らかに男性を意味する用法	12	8	17	37	10	1	8	19
②女男を含め勤め人一般をさす用法	13	3	6	22	9	8	7	24
③曖昧な用法	8	1	7	16	0	0	0	0
④職業の代表としてあげる(例「サラリーマンなど」)用法	0	1	1	2	0	0	0	0
合 計	33	13	31	77	19	9	15	43

二〜三割を占めて一、二位、また「カメラマン」が三割前後で三位を保っている。九一年には、まだバブルがはじける前の人気職種を反映してか、一〇位以内に入っていた「証券マン」「商社マン」は、九六年および今回の調査では、〇〜三件みられるにとどまっている。

次に、出現頻度が高く、また、すでに指摘したように重要な問題をはらんでいる「サラリーマン」という語を使っている記事に関して前回調査の結果と比較してみると、表22に示したように、九六年は合計七十七件みられた「サラリーマン」ということばを用いた記事が、二〇〇一年には四三件へとほぼ半減している。内訳をみると、①明らかに男性の勤め人を意味する用法が三七件あったものが二〇〇一年には一九件へと減少し、②女性と男性も含む勤め人一般をさす用法に関しては二二件だったものが二四件とほぼ同じ、③男性の勤め人を意味するのかそれとも女性男性を含む勤め人一般をさすのか曖昧な用法は一六件からゼロ件へと大きく減じ、また④「サラリーマン」ということばに職業の代表性を与える用法も二件だったものが皆無となった。

このように、件数としては、男性を意味する用法と曖昧な用法が減り、女男を含む勤め人一般をさす用法が横ばいというかつこうだが、総数が減つた分だけ、女男の勤め人一般をさす用法がほかの用法との対比において相対的に増えたと言うべきだろう。「サラリーマン」ということばが、むしろ女性も含めた勤め人一般に使われる機会がより多くなってきたことは、このあと3で考察するように、男性イメージが喚起されやすい「サラリーマン」という語の影で、女性の当事者性が不可視化させられてしまうという事態の一層の進展へとつながっていくのである。

3 「サラリーマン」の用法にあらわれた新聞のジェンダー観

(1) 「サラリーマン」が勤め人一般の意味で用いられることによる女性からの当事者性の剣幕

2でも指摘したように、新聞で多用される「サラリーマン」ということばが抱える大きな問題点は、男性のイメージが非常に強い「サラリーマン」という表現で女性・男性双方に関わる問題が論じられているところにあると思われる。salaryとは、ラテン語のsal「塩」を語源とし、もともと古代ローマで兵士が戦時手当として余分に塩を買うために支給されたお金を指すことばであったようであるが、⁽¹³⁾「サラリーマン」自体は和製英語であり、その意味は、たとえば『広辞苑【第五版】』では【salary】俸給。給料。月給。【salaried man】俸給生活者。給料生活者。月給取り。」と説明されている。

たとえば、朝日一〇月五日に掲載されていた医療制度改革に関連する次のような記事をみてみよう。

来年度予算編成の焦点の一つである医療制度改革について、財務省は4日、独自の意見を公表した。医療費全体の伸びを国民所得の伸び程度に抑える仕組みを導入し、医療機関での患者の窓口負担は、将来は年齢にかかわらずかかった医療費の3割に統一する。……患者の窓口負担は現在、サラリーマン本人は2割、自営業者らが3割、70歳以上の高齢者は1割の負担が基本。厚労省案では年齢別に分け、69歳以下が3割（3歳未満は2割）、70～74歳は2割、75歳以上が1割とした。財務省案は、現在70歳以上の患者は現行通りとした上で、年齢にかかわらず外来1回または入院1日あたり500円を支払い、その上で3割を負担する仕組みを提案し

た (朝日、一〇月五日)。

ここに登場する「サラリーマン」とは誰だろうか。医療費全般の変更について述べる本文の文脈からは、この記事のサラリーマンが、女性も男性も含めた雇用されて働く人びと全体をさして用いられていることは明らかである。しかしながら、読み手にとつて「サラリーマン」が男性イメージである場合、書き手が、女性を含む勤め人一般として「サラリーマン」を使用していても、無意識のうちにそれらの記事の主体として男性が想定されてしまう恐れがある。

近年、年金・税制改革にともない、「源泉分離は維持すべきだ。サラリーマンは所得が2千万円以下だと源泉徴収で済むのに、株の譲渡益だけ確定申告しなければならぬのでは、面倒くさくなって投資意欲をそぐ」(朝日、一〇月二日)といったように、「サラリーマン」ということばが女性を含む勤め人一般の総称として用いられる頻度は高くなってきている。しかしながら、これまで述べてきたように、サラリーマンということばに男性イメージが強くはりついているため、こうした記事の主体として自動的に男性がイメージされてしまい、会社員として働き、税金・年金を収めている女性の存在が、重要な議論の背後に隠されてしまう恐れがある。その結果、読み手である女性自身が、こうした議論に、はたして自分自身が含まれているのか否かを、はっきり判別することができなくなってしまうのである。このような「サラリーマン」という男性イメージの強いことばを勤め人一般の含意で用いる新聞の用法は、女性から、その新聞記事で論じられるイッシュューに対する当事者性を奪ってしまう作用をもつ表現だと言えるであろう。

(2) 記事における「サラリーマン」の使われ方

次に、これまで論じてきたような問題をはらむ「サラリーマン」ということばが、今回の調査期間中、実際の記事の中では、どのような意味内容で、また、どのような分野において使われていたかを、一九九六年調査に引き続き、調べてみた。その結果、「サラリーマン」という語は、朝日で一九件、毎日で九件、読売で一五件、三紙合計四三件使用されていた。

これらの記事における「サラリーマン」ということばの意味内容は、①明らかに男性の勤め人を意味する用法、②女性も男性も含む勤め人一般をさす用法、③男性の勤め人を意味するのかそれとも男女を含む勤め人一般をさすのか曖昧な用法、④職業の代表例として「サラリーマン」ということばを用いる用法、の四つに大別することができる。たとえば、①の男性の勤め人の記事例としては、「勤め帰りのサラリーマンやOLが立ち寄る」(朝日、一〇月一日夕刊)、②の女性も含む勤め人として扱っている例としては、「中小企業サラリーマンが加入する政府管掌健康保険」(毎日、一〇月一二日)、といった記事例をあげることができるが、今回③と④の用法はゼロ件であった。

(単位：件)

文化	その他	合計	読 売										合 計															
			税金	年金	医療保健	経済	労働	健康	選挙	余暇	生活	都市化	文化	その他	合計	税金	年金	医療保健	経済	労働	健康	選挙	余暇	生活	都市化	文化	その他	合計
0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	1	3	8	1	1	0	0	4	2	0	3	2	0	3	3	19
0	0	8	1	4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	4	14	3	0	0	0	0	1	0	0	0	24
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	9	1	4	1	1	2	0	0	2	0	0	1	3	15	3	5	14	3	4	2	0	3	3	0	3	3	43

一方、これらサラリーマンという語が用いられている記事が、どのような分野の記事であるかを、「税金」「年金」「医療保険」「経済」「労働」「健康」「選挙」「余暇」「生活」「都市化」「文化」「その他」の一二分野に分けて、みてみた。

四種類の「サラリーマン」の意味内容を縦軸に取り、記事分野を横軸に取って四三件の記事を分類したのが表23である。まず、縦軸をみると、「サラリーマン」ということばは、総計四三件中二四件(五五・八%)で、女男を含めた勤め人一般をさす語として用いられており、過半数の用例において女性の当事者性を剝奪する表現として機能してしまっていることがわかる。次いで二番目に多かったのは、文字通り男性の勤め人を意味する用法の一九件(四四・二%)で、曖昧な用法と、職業の代表例として用いられているケースはそれぞれゼロ件にとどまった。

では、「サラリーマン」ということばは、どのような分野の記事で使われているのだろうか。表23横軸の一二の記事分野でみると、総計で最も多いのは「医療保険」の一四件(三二・六%)、それに「年金」の五件(一一・六%)、「労働」の四件(九・三%)が続いた。おおむね、「サラリーマン」ということば

表 23 記事中で使用されている「サラリーマン」

記事分野 記事における「サラリーマン」の意味	朝 日										毎 日												
	税金	年金	医療保健	経済	労働	健康	選挙	余暇	生活	都市化	その他	合計	税金	年金	医療保健	経済	労働	健康	選挙	余暇	生活	都市化	
①明らかに男性を意味する用法	1	1	0	0	2	2	0	0	2	0	2	10	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
②女男を含め勤め人一般をさす用法	0	0	7	1	0	0	0	0	1	0	0	9	1	0	6	1	0	0	0	0	0	0	0
③曖昧な用法	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
④職業の代表として挙げる(例「サラリーマンなど」)用法	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	1	1	7	1	2	2	0	0	3	0	2	19	1	0	6	1	0	0	0	1	0	0	0

は、「医療保険」「年金」「税金」などの社会保障の分野で使用されるか、「労働」の分野で使用される傾向が強くなっている。

次に、これを縦軸のサラリーマンの意味内容とクロスさせると、「医療保険」分野で使われている「サラリーマン」ということばの全てが女男を含めた勤め人一般をさして使われており、また「年金」分野の記事においても、ほとんどが同様に勤め人を総称する意味で使われていた。「医療保険」分野では具体的には、たとえば、「大企業のサラリーマンらが加入する健康保険組合」（朝日、一〇月二二日）、「サラリーマンの保険料がアップされると労使折半のため企業負担が増える」（毎日、一〇月一日）などの記事があったが、こうした表現からは、これらが雇用されて働く女性にも関連のある記事であることに思い至らない人も多いだろう。また、「年金」分野の記事例としては、「今年度から厚生年金の支給開始年齢を六十歳から段階的に引き上げる措置が始まったことは、サラリーマンが不信感を強める原因だろう」（読売、一〇月八日）といった記事をあげることができる。

(3) 記事中の「サラリーマン」はどう読まれているか

先の 2 では、国学院大学の学生を対象に、「OL」および「サラリーマン」ということばに対して、どのようなイメージを持つかを訊ねた調査の結果について紹介した。この調査では、同時に、学生たちに「サラリーマン」ということばが使われている二〇〇一年一〇月前半の新聞記事を八つ読んでもらい、それぞれの記事で使われているサラリーマンという語の意味内容をどう解釈したかについても訊ねている。それらの記事の見出しは、以下の通りである。

記事 1 「確定拠出金スタート 運用方法 自分で選ぶ」（読売、一〇月一三日）

- 記事2 「源泉分離廃止に不満 証券業界繰り越し控除『一步前進』」(読売、一〇月四日)
- 記事3 「政府の浪費に防止策を提案」(朝日、一〇月一三日夕刊)
- 記事4 「社説 社会保障像が見えない」(朝日、一〇月三日)
- 記事5 「特殊法人見直し 54法人『引き続き検討』 真価問われる『小泉改革』」(朝日、一〇月七日)
- 記事6 「医療費全体の抑制提言 財務省『3割負担』に統一」(朝日、一〇月五日)
- 記事7 「写真や音楽に新しい表現法」(朝日、一〇月一日夕刊)
- 記事8 「主婦の年金6案を提示 厚労省が論点整理」(朝日、一〇月四日)
- 以上の八つの記事が扱う分野は、表24の左から二列目に示した通りである。またそれらの新聞記事の中で使われている「サラリーマン」ということばの用いられ方を、先と同じ、①明らかに男性の勤め人を意味する用法、②女性も男性も含む勤め人一般をさす用法、③男性の勤め人を意味するのかそれとも女男を含む勤め人一般をさすのか曖昧な用法、④職業の代表例として「サラリーマン」ということばを用いる用法の四種類に分類して、その結果を、表24の左から三列目に示し

表24 「サラリーマン」記事に対する学生アンケート結果

記事No.	記事分野	記事中の「サラリーマン」の意味内容	学生回答 (N67)					
			男性をさす		女男の両方をさす		女性をさす	
			人数	比率	人数	比率	人数	比率
1	年金	職業の代表例	39	58.2%	28	41.8%	0	0%
2	税金	女男を含む勤め人一般	41	61.2%	26	38.8%	0	0%
3	税金	女男を含む勤め人一般	26	38.8%	38	56.7%	3	4.5%
4	労働	男性の勤め人	41	61.2%	21	31.3%	3	0.5%
5	その他	女男を含む勤め人一般	47	70.1%	16	23.9%	0	0%
6	医療保険	女男を含む勤め人一般	24	35.8%	39	58.2%	1	1.5%
7	余暇	男性の勤め人	42	62.7%	18	26.9%	4	6.0%
8	年金	男性の勤め人	46	68.7%	1	1.5%	17	25.4%

※学生回答…「性別不記載」「無回答」は省略

た。学生たちには、年金、税金、労働、保険、余暇などを扱ったこれらの記事を読んでもらい、そこで使われている「サラリーマン」ということばが、男性をさして用いられているのか、女性をさして用いられているのか、あるいは女性と男性を含めた勤め人の総称として用いられているのか、判断してもらった。その結果は、表24の右半分に示されている。

まず、記事中の「サラリーマン」が明らかに男性を意味している記事4、記事7、記事8については、それぞれ六一・二%、六二・七%、六八・七%と、およそ三分の二の学生が、男性の勤め人に言及した記事だと答えている。一方、これらの記事中の「サラリーマン」が女・男を含めた勤め人一般をさしていた学生が、記事4で三一・三%、記事7で二六・九%存在しとこと、また記事8の中の「サラリーマン」が女性をさしていることから学生が四人に一人みられたことは、「サラリーマン」ということばの含意が、他方できわめて曖昧であるという事実を示唆している。

次に、記事中の「サラリーマン」が、女性と男性を含む勤め人一般をさすと考えられる記事2と記事5に関しては、それぞれ六一・二%、七〇・一%が、これらの記事は男性について述べていると答えた。実際には両性が対象となっている記事であるにもかかわらず、多くの読み手が、「サラリーマン」という語が使われているだけで、男性に関する記事であると判断してしまっているのである。また、記事1のように、「サラリーマン」が職業の一つの代表例としてあげられているにもかかわらず、男性対象としてとらえる回答が過半数を越しているケースもある。

(4) 勤め人一般をさす「サラリーマン」という用法の定着

このように、「サラリーマン」ということばは、勤め人一般を表すことばとして定着しつつあるかのようにみえ

る。これらは、厚生労働白書など国が出す出版物や研究報告書の中でも数多く使用されており、行政が、勤め人一般の総称としての「サラリーマン」ということばの定着化に少なからず「寄与」していると考えられる。

内閣府は、二〇〇三年に男女共同参画の視点からの表現ガイドライン『公的広報の手引き—みんなに届く広報のために』を作成した。その中の「1-1 女性にも男性にも伝わりますか?」では、「サラリーマンのための〇〇制度ができました」という事例をあげ、「広報の内容が男女双方に関わるにもかかわらず、どちらかが想定されていないかのような表現を使うと、伝えるべき相手に正しく伝わりません」と指摘し、そうした表現の是正を促している⁽¹⁴⁾。しかし、残念ながら、改善のきざしはこれまでのところほとんどみられない。

年金や税制、医療保険などに関する新聞記事の少なからぬ出所元は、右にあげた各種白書や関係省庁による発表データおよびプレスリリースの文章であると思われる。したがって、まず行政が、このような表現の使用を改める必要があるだろう。そして、新聞をはじめとするメディア側は、正確な報道を行うという新聞の基本原則を貫く上でも、行政が流すこれらのことばを無前提的に用いるのではなく、批判的な吟味の俎上に乗せ、ジェンダーニュートラルないしはジェンダー包括的用語・表現を創り出し、使用してゆくことが必要であろう。

4 他者との関係で女性を表現することばの頻用

(1) 男性や家族との関係で表現される女性

女性のジェンダーをことさら強調する表現の中には、女性を夫や家など、いわば私的な領域と結びつけて表現し、その「家庭性 (domesticity)」、や夫への帰属性を強調する表現 (以下、他者との関係で女性を表現すること

ば) もある。

これらのことばの多くは、私的・公的な場を問わず広く用いられているが、多数の読者を持つ新聞の紙面上で多用されることにより、人びとのジェンダー意識の形成に、必ずしも意識されないまま、影響を及ぼす可能性がある。今回の調査において、他者との関係で女性を表現することばは、どれほど数えられただろうか。

調査期間中の紙面にみられた妻役割や母親役割等、女性が家族や男性との関係で表現されることばは、表 25 に掲げたとおりである。まず第一位の「主婦」は三紙合計二二一件と他に抜きんでて多用されているが、それに「夫人」三六件、「皇后」二二一件、「王女」二二一件、「奥さん」一〇件、以下「嫁」「女房」「姑」などが続く。これら他者との関係で女性を表すことばは、合計すると期間中二五八件数えられたが、各紙別の合計数には差があり、朝日の一一一件について毎日の八〇件、読売の六七件と、朝日が読売の二倍近く使用している。これらの表現を一日あたりに換算すると、一紙で五・七件使われていることになる。

第一位となった「主婦」という語は、共働き世帯が増加し、家事専従の女性がいる世帯の数を上回っている現実にもかかわらず、新聞記事の中で相変わらず根強く使い続けられている。今回の調査では、女性を家族や男性との関係であらわす表現総数のうちの四七%と、半数近くを占めていた。女性は、職業をもつて働いていようがいまいが、結婚すれば家事・育児の主な担い手とみなされ、「主婦」と呼ばれる実態が反映されていると言えるだろう。

(2) 「夫人」にみる妻の脱主体化

次に、「夫人」ということばに注目してみよう。これは、女性(妻)を男性(夫)に付随させた表現であることが比較的認識しやすいことばであるが、使用頻度は三六件で、第二位と上位であった。こうした結果から、ジェン

表 25 他者との関係で女性をあらわすことば

(単位: 件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合 計	比率	
1	主 婦	57	29	35	121	46.9%	
2	夫 人	12	14	10	36	14.0%	
	内 訳	①妻の名+「夫人」	(4)	(9)	(2)	(15)	
		②「夫人」単独	(4)	(3)	(4)	(11)	
		③夫の肩書+「夫人」	(2)	(0)	(2)	(4)	
		④夫の姓+夫人	(2)	(0)	(2)	(4)	
		⑤その他	(0)	(2)	(0)	(2)	
3	皇 后	10	11	1	22	8.5%	
4	王 女	7	9	5	21	8.1%	
5	奥 さ ん	3	5	2	10	3.9%	
6	嫁	3	3	2	8	3.1%	
7	女 房	1	1	5	7	2.7%	
8	姑	2	2	0	4	1.6%	
9	姫	3	0	0	3	1.2%	
	家 内	1	1	1	3	1.2%	
	王 妃	0	1	2	3	1.2%	
12	恐 妻	2	0	0	2	0.8%	
	愛 妻	2	0	0	2	0.8%	
	奥 方	1	1	0	2	0.8%	
	妃	0	2	0	2	0.8%	
	お 袋	0	0	2	2	0.8%	
17	カ ミ サ ン	1	0	0	1	0.4%	
	嫁 女	1	0	0	1	0.4%	
	兄 嫁	1	0	0	1	0.4%	
	小 姑	1	0	0	1	0.4%	
	聖 母	1	0	0	1	0.4%	
	大しゅうとめ	1	0	0	1	0.4%	
	未 亡 人	1	0	0	1	0.4%	
	お嬢ちゃん	0	1	0	1	0.4%	
	お嫁さん	0	0	1	1	0.4%	
奥 様	0	0	1	1	0.4%		
合 計		111	80	67	258	100.0%	

ダー間の権力関係や不均等関係に敏感とは言えないメディアのありようを読み取ることができよう。

「夫人」の使われ方をさらに細かく分類してみると、今回最も多かったのが、①妻の名＋「夫人」(「たまえ夫人」「オルガ夫人」など)で、「夫人」呼称全体の四割を占め、ついで②「夫人」単独、③夫の肩書き＋「夫人」(「前当主夫人」「市長夫人」など)、④夫の姓＋「夫人」(「レノン夫人」など)が続いた。最多の、妻の名＋「夫人」は、姓という公的な苗字を夫にあずけ、もっぱら下の名という私的な表象であらわされている点と、「夫に付随する人」というイメージを想起させる「夫人」という呼称がつけられている点で、二重に「夫の所有物」であることが示唆されている。これは、夫の肩書き＋「夫人」でも同様である。夫の属性＝肩書きによって初めて妻は、その存在を同定されるのである。

今回、「夫人」が単独で使われたために、本人の名前がまったく隠されてしまっているような記事もあった。たとえば、毎日一〇月一日夕刊の文化・メディア面の新刊案内欄において、小出啓子著『爆走！小出家の人々』は、「有森裕子、高橋尚子らを育てた小出義雄監督の夫人が家庭での監督の素顔を明かす。千葉県の教師時代、12歳離れた結婚、夫人の闘病生活、リクルートでの「セクハラ騒ぎ」、3人の娘と夫の語らいなどが楽しくつづられている」と紹介されているが、ここには、著者であり当事者の一人でもある小出啓子の姓名が一度も記されず、すべて「夫人」とされている。姓名が記されていたのは、書名の下「小出啓子著」の部分だけであった。

このように、新聞の中で女性は、夫との関係において表現され、社会的に独立した人間であることから疎外されているのである。

(3) 女性や家族との関係で表現されることの少ない男性

次に、男性が他者や家族・世帯や妻との関係で表されることは、表26に示したように、「皇太子」の三二件を最多に、「王子」二一件、「主人」一〇件、以下「子息」「亭主」などが続いた。三紙を合計すると七三件で、毎日が最も多く三〇件、朝日が二五件、読売が最も少なく一八件の使用頻度であった。朝日、読売では「皇太子」の件数が多く、毎日では「王子」が目立つ。また、毎日は「主人」の使用頻度が他紙よりも高い。女性が他者や家族・世帯・夫との関係で表される語は二五八件もあったから、その四分の一の七三件という数値は、随分と非対称的である。これ一つをとっても、女性がいかに他人との関係で表現されやすく、主体性を持っていないかがうかがわれよう。

ところで、今回の調査で考慮すべき点は、調査前に起きた九・一一米・同時多発テロの影響と、調査期間中に始まったアフガニスタンにおける米英のタリバンやアルカイダに対する武力攻撃の影響である。これらの一連の異常な出来事が、紙面に通常とは異なつた展開をもたらし、集計結果に影響を及ぼしている蓋然性は否定できない。過去のデータと比較するためには、後の節で分析する敬称の「さん」と「氏」の使用分けの調査において「オサマ・ビンラディン(氏)」を集計しなかつたように、アフガニスタン攻撃関連の記事

表 26 他者との関係で男性をあらわすことば

(単位: 件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計	比率
1	皇 太 子	12	7	13	32	43.8%
2	王 子	8	13	0	21	28.8%
3	主 人	1	6	3	10	13.7%
4	子 息	1	1	0	2	2.7%
	亭 主	0	0	2	2	2.7%
6	若 だ ん な	1	0	0	1	1.4%
	若 君	1	0	0	1	1.4%
	主 夫	1	0	0	1	1.4%
	お 坊 ち ゃ ん	0	1	0	1	1.4%
	ダ ン ナ	0	1	0	1	1.4%
	御 曹 司	0	1	0	1	1.4%
	合 計		25	30	18	73

を除いたデータをもつておく必要がある。

そこで、戦争関連記事をより分け、それらを調べてみたところ、他者との関係で女性を表すことばはみあたらなかったものの、他者との関係で男性を表すことばでは、サウジアラビアの「アブドラ皇太子」、「アルワリド王子」、アフガニスタンの「モスタファ王子」が、それぞれ米国務長官や日本の高村特使と会談したり、ニューヨーク市長に寄附を拒否されたりなど、いくつかの記事に出てきていた。表 27 は、これら戦争関連の「皇太子」一四件、「王子」一六件を除いて集計したデータである。「皇太子」が一八件で一位であることに変わりはないが、一〇件の、「主人」が二位に浮上して、五件の「王子」が三位となる。

(4) 他者との関係で女性があらわされることばの経年比較

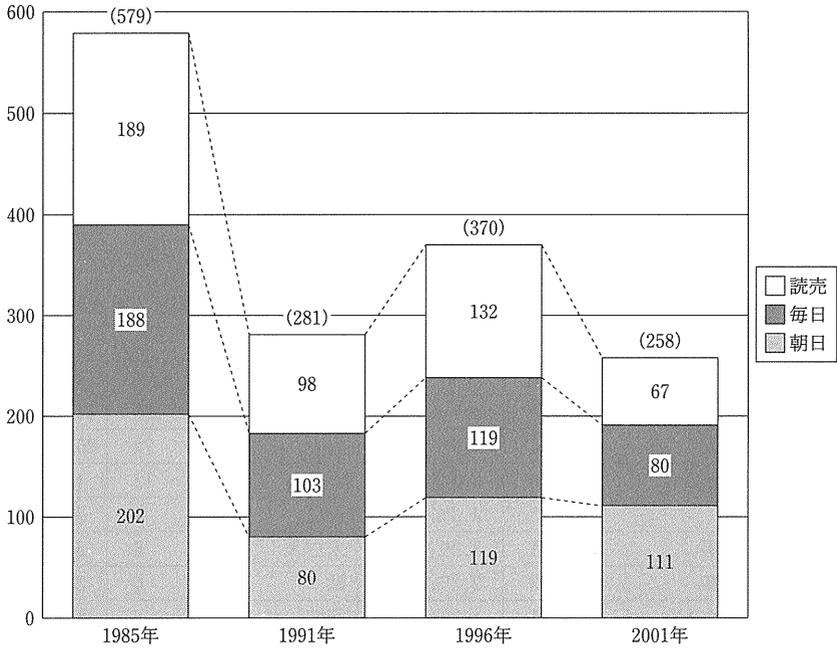
—— 根強い「主婦」と「主人」

過去四回の調査結果から、他者との関係で女性をあらわすことばの合計件数の推移をみたのがグラフ 11 である。一九八五年は五七九件みられたものが、九一年は二八一件、九六年は三七〇件、二〇〇一年は二五八件と、多少の上下はあるが、流れとしては緩やかな減少傾向にあると言えそうである。前回に比べると読売の減り方が大きい。

表 27 他者との関係で男性をあらわすことば (戦争関係を除く)
(単位: 件)

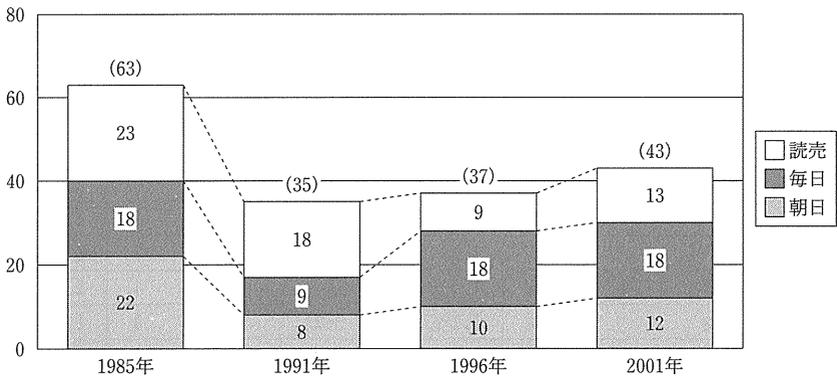
順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計	比率
1	皇 太 子	5	5	8	18	41.9%
2	主 人	1	6	3	10	23.3%
3	王 子	2	3	0	5	11.6%
4	子 息	1	1	0	2	4.7%
	亭 主	0	0	2	2	4.7%
6	若 だ ん な	1	0	0	1	2.3%
	若 君	1	0	0	1	2.3%
	主 夫	1	0	0	1	2.3%
	お 坊 ち ゃ ん	0	1	0	1	2.3%
	ダ ン ナ	0	1	0	1	2.3%
	御 曹 司	0	1	0	1	2.3%
合 計		12	18	13	43	100.0%

グラフ 11 他者との関係で女性をあらわすことばの経年比較 (単位: 件)



※ グラフの () 内は合計

グラフ 12 他者との関係で男性をあらわすことばの経年比較 (単位: 件)



※ グラフの () 内は合計

一方、他者との関係で男性をあらわすことばの経年変化をグラフ12でみると、一九八五年には六三件だったものが九一年には三五件と減り、その後九六年三七件、二〇〇一年四三件と、再び微増してきているようにみえる。

表28には、他者との関係で女性をあらわすことばの上位のものを、各調査年ごとに並べてみた。「主婦」は、全回を通して常時一位で四割前後を占め、その根強さがうかがえるが、件数そのものは、少しずつ減少してきているようにみえ

表 28 他者との関係で女性をあらわすことば上位10位の経年比較 (3紙合計)

1985年				1991年			
順位	表 現	件数	比率	順位	表 現	件数	比率
1	主婦	259	44.7%	1	主婦	126	44.8%
2	夫人	144	24.9%	2	夫人	72	25.6%
3	奥さん	28	4.8%	3	奥さん	12	4.3%
4	嫁	25	4.3%	4	女房	9	3.2%
5	女房	21	3.6%	5	未亡人	8	2.8%
6	花嫁	13	2.2%	6	姑	6	2.1%
7	未亡人	11	1.9%	7	花嫁	5	1.8%
	姑	11	1.9%		お嬢さん	5	1.8%
9	内妻	9	1.6%	9	嫁	4	1.4%
	家内	9	1.6%		先妻	4	1.4%
				ほか2語			

1996年				2001年			
順位	表 現	件数	比率	順位	表 現	件数	比率
1	主婦	145	39.2%	1	主婦	121	46.9%
2	夫人	95	25.7%	2	夫人	36	14.0%
3	(お)嫁(さん)	29	7.8%	3	皇后	22	8.5%
4	奥さん(奥さま)	17	4.6%	4	王女	21	8.1%
5	女房	16	4.3%	5	奥さん	10	3.9%
6	姑	15	4.1%	6	嫁	8	3.1%
7	養女	6	1.6%	7	女房	7	2.7%
8	とつぐ	5	1.4%	8	姑	4	1.6%
9	若妻	4	1.1%	9	王妃	3	1.2%
	乙女	4	1.1%		家内	3	1.2%
ほか2語				ほか1語			

る。また、過去には常に二位で二五%前後を占めてきた「夫人」(ただし八五年は未カウント)は、件数、比率とも今回は大きく減った。この二つに続く「奥さん」「嫁」「女房」「姑」は、件数を減らしながらも、いまだに使われ続けている。

次に、他者との関係で男性をあらわすことばの上位を掲げた表29をみると、毎回二〇〜三〇件と、半数前後を占めていた「主人」が、今回は大きく減って一〇件、二三%となっている。ただし、九六年までは「皇太子」を、他者との関係で男性をあらわすことばとしてカウントしてこなかったの

で、それまで通り「皇太子」を除

表 29 他者との関係で男性をあらわすことば上位10位の経年比較 (3紙合計)

1985年				1991年			
順位	表 現	件数	比率	順位	表 現	件数	比率
1	主人	30	47.6%	1	主人	19	54.3%
2	亭主	8	12.7%	2	夫君	6	17.1%
3	夫君	4	6.3%	3	亡夫	5	14.3%
	だんなさん	4	6.3%	4	亭主	2	5.7%
5	女婿	3	4.8%		6	主夫	2
	婿	3	4.8%	6		女婿	1
	婿入り	3	4.8%				
	花婿	3	4.8%				
	その他	5	7.9%				

1996年				2001年			
順位	表 現	件数	比率	順位	表 現	件数	比率
1	主人	22	59.5%	1	皇太子	18	41.9%
2	子息	4	10.8%	2	主人	10	23.3%
3	娘婿	3	8.1%	3	王子	5	11.6%
4	せがれ	2	5.4%	4	子息	2	4.7%
5	花婿	1	2.7%		亭主	2	4.7%
	だんなさん	1	2.7%	6	お坊ちゃん	1	2.3%
	新郎	1	2.7%		ダンナ	1	2.3%
	ご夫君	1	2.7%		御曹司	1	2.3%
	ヤンパパ	1	2.7%		若だんな	1	2.3%
	家人	1	2.7%		若君	1	2.3%
				ほか1語			

いてカウントしなすと、「主人」は二位ではなく一位となり、他者との関係で男性をあらわすことば全体の四割ぐらいの比率で使われている計算となる。

(5) 婚姻関係の呼称に表象される主体性のありか

これまでみてきた調査結果から派生して、気になる点をいくつかあげておきたい。

第一点目は、「主婦」と「主夫」の意味の非対応性についてである。

家事責任を負う既婚女性・男性を表したことである「主婦」と「主夫」は、同じ家事役割を担っているにもかかわらず、まずもって使われる件数が桁違いである(今回は一二一件対一件)。また、これら二つのことばに異なった意味合いが含まれている点にも留意する必要があるだろう。

「主婦」という表現が新聞紙面上で用いられる件数が減少傾向にあることは先にふれたが、既婚女性が、有職であろうが家事専業であろうが、総じて「主婦」ということばでくくられる社会的現実にはあまり変化はないようである。一方、既婚男性の場合、「主夫」ということばでくくられることはほぼ皆無であり、家事専業の場合にだけ、強調して「(専業) 主夫」と呼ばれる。アン・オークレーは、現代の主婦役割の特徴として、「①もっぱら女に割り振られ、②経済的に依存しており、③労働として認知されず、④女にとって主たる役割である」の四点をあげている。⁽¹⁵⁾ すべての既婚男性が「主夫」として認識されにくいのは、家事責任を一義的に担うのは女性であり、一方、男性の一義的な役割は稼ぎ手としてのそれなのだから、「主夫」はあくまで例外的という位置づけがなされているからではないだろうか。

第二点目は、婚姻関係における「妻」をめぐる呼称の問題についてである。

一般的には「妻」ということばに対応するのは「夫」ということばである。この場合、男性からみたパートナー、女性からみたパートナーという点で、「妻」「夫」は対等な用いられ方をしていると見える。問題は、どのようなパートナーのかを示す、¹⁵形容詞が、「妻」にしか付かないという点である。今回九位にある「家内」、一二位にある「愛妻」「恐妻」などがその例で、「家にいる妻」や「夫にとって」愛しい妻」「(夫にとって) 恐い・恐ろしい妻」というように、夫にとつてどのような妻なのかを分類していることばと言うこともできる。今回みられなかった「若妻」「新妻」「老妻」「悪妻」「良妻」「愚妻」や、「妻」ではないが「古女房」もそれにあたるだろう。

それに対して、妻にとつて夫がどういふ夫なのかを表すことばは、これまでの本調査において一度もカウントされておらず、実際日常的にもほとんどみられない。中村桃子が指摘しているように、「辞書によると、『良妻』の反意語は『悪妻』となつているが、『良妻』の反対は『良夫』と考えることも可能である¹⁶」。にもかかわらず、「良夫」や「悪夫」のニュースが新聞の紙面を飾ることはないのである¹⁷。

次に、「妻」に付く接頭辞で、「人の・誰かの」ということを表す「人妻」ということばについてである。これもこれまでと同様に「人妻」と対応した意味での「人夫」ということばは存在しない。しかし、既婚で子どもがいる場合の男性は、しばしば「妻子もち」と表現される。このとき「人妻」と「妻子もち」は、対等な関係として意味付けられているのだろうか。

「人妻」は、既婚女性であるというより人の妻である(主体は夫)という意味合いが強いのに対し、「妻子もち」は、妻と子どもがいる(主体は自分+夫)という意味合いが強くなる。既婚女性・既婚男性を表すことばの主体がどちらとも男性であるということは、婚姻関係における主体が夫であることを端的に表していると言えらる¹⁸。

第三点目は、今回第二位となったが、相変わらず上位に位置している「主人」ということばの問題についてであ

る。

「主人」は、『広辞苑【第五版】』によると、「①一家のあるじ。②自分の仕えている人。③人を貴んという語。貴下。④妻が夫を指している称。⑤客に対して、これをもてなす人。」とある。「主人」ということばの問題点は、①や②の意味の「主人」と、④の意味での「主人」がはっきり区別できない点、すなわち妻が夫を指して習慣的に「主人」と言った場合でも、それに重なるようにして「家のあるじ」や「自分の仕える人」という意味合いが、少なからず含み込まれてしまうところにある。この点を遠藤織枝は、次のように指摘している。

本来の主従関係の上にたつ「主人」は、特別古い文献でなくても現在日常的に目にふれるごく一般的な刊行物に使われている。とすれば、夫の意を表す「主人」だけを主従関係のない単なる符号と切り離して処理することはできなくなるのではないか。たとえそれを使う本人は主従関係を捨て去った符号として「主人」と呼んでいるとしても。その言葉が発せられたあとも、社会的に単なる符号として受け取られる保証はないのである。⁽¹⁹⁾

ここで遠藤は、ことばのあいまいさを中心に据えて説明しているが、婚姻関係における主体は誰かを示している点で、主体性問題としてとらえることもできるだろう。

憲法二四条が「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立」し、両性は本質的に平等で、妻と夫は同等の権利を有していることを宣しているのをあげるまでもなく、婚姻関係における女性と男性は、どちらもが主体であるはずである。しかしながら、今回ふれた「人妻」にせよ「主人」にせよ、主体性が夫にあるかのような慣用的なことばを吟味なしに新聞は使用している。「ことば」のプロたちがつくる新聞がジェンダー不平等な言語を流布してしまっ

いる責任は重いと云わねばなるまい。

「主人」という語が、妻の夫に対する呼称として用いられるようになったのは、比較的最近のことのようである。遠藤氏によれば、国語辞書に「夫をさす語」の意味が載るようになったのは、昭和二〇年代の後半からのことである。⁽²⁰⁾ 女性の主体性を剝奪する「主人」のこうした用法は、日本社会に広く普及しているようにみえるが、その歴史の相対的「浅さ」からみても、それを変えてゆくことは、それほど困難なことではないのかもしれない。妻と夫の関係を実質的に平等なものにするためにも、両者を対等にあらわす表現の本格的な模索が望まれる。

5 女性であることを不必要に強調するステレオタイプ表現

(1) 外見や性格などへの言及による「女らしさ」の強調

新聞紙面上の見出しや記事には、女性および男性についてのステレオタイプな表現がしばしば見出される。人は、経験的に習得した文化的に規定されたものの見方の枠組みに、認識対象である事象や社会、集団、国、人物、性格などを押し込んで類型化してしまうことをしばしば行うが、毎日多くの人びとに読まれる新聞に掲載されたステレオタイプ表現は、こうした定型化された女性像・男性像を読者に喚起し、性別に対する通俗的な理解を作り上げるうえで、少なからぬ役割を果たしてしまう可能性を有している。

このような、固定観念に基づくステレオタイプなジェンダー表現を、女性については「女らしさ」「母親らしさ」「主婦役割」「その他」に、男性については「男らしさ」「父親らしさ」「夫役割」「その他」に分類し、その出現件数を示し、分析を行ってみた。

女性に対するステレオタイプ表現を全て拾い上げ、上述のカテゴリに従って分類したのが表 30 である。

まず、「女らしさ」への言及に関しては、表 30 の上段にみるように、朝日九六件、毎日四九件、読売三〇件の、合計一七六件が数えられた。その内訳をみると、容姿や服装など「女らしい」外見を強調するものが三紙合計で七二件みられた。朝日で四六件と、毎日の一六件、読売の九件を大きく上回っている。記事で伝えたい主情報とは別に、「年上の美人カメラマン」（毎日、一〇月六日夕刊）のように容姿の「美しさ」や「可愛らしさ」、また「きれいなドレスをまとって出てきた」（朝日、一〇月一〇日夕刊）のように服装に関する言及などが目立つ。

たとえば、第三八回文芸賞を最年少で受賞した綿矢りさについて、冒頭「あどけなさの残る、キュートな顔立ち、恥ずかしげにうつむくしぐさ」と外見の「可愛らしさ」が述べられ、そのような作者が文芸賞の受賞者であることへの違和感が「小説のイメージと作者のギャップに何よりも驚かされる」と述べられているのは、その典型的な記事例だろう（読売、一〇月一三日）。綿矢りさに関しては、同様に「真つすぐな黒髪」（朝日、一〇月四日）との記述もある。

また、第四九回全日本吹奏楽コンクールの受賞校に関する記事では、東京代表で出場した江戸川女子高校と東海大菅生高校がともに銅賞を獲得したことが紹介されているのだが、江戸川女子高校については、「淡いピンク色のブレザー姿で登場した江戸川女子の自由曲は……」と、ファッションについて言及したのちに演奏曲の評価が述べられる。それに対し、東海大菅生高校の記事ではファッションへの言及はなく、「優美で明快、流れるような演奏をした」という曲の演奏の評価のみで終わっている（朝日、一〇月一日）。

次に、心理、行動、態度面で「女らしさ」を強調する記事は、計六五件みられた。朝日が三三件で最多、毎日一七件、読売一五件となっている。たとえば、ソウルシンガールの鈴木聖美は、「肝っ玉かあちゃんならぬ、肝っ玉ね

表 30 女性のステレオタイプ表現

(単位:件)

		記事例	朝日	毎日	読売	合計
女性一般に関して(女らしさ)	女性について、容姿・服装など外見を詳しく述べるもの	「あどけなさの残る、キュートな顔立ち、恥づかしげにうつむくしぐさ」「淡いピンク色のブレザー姿で登場した江戸川女子の自由曲は」「彼女が女性としてのキレイなドレスをまとうて来た」「3人の美人姉妹」「むっと怒りながら、どこかかわいい魔女のような表情をしていたに違いない」「年上の美人カメラマン」「美人だが剛勇できこえた女」「花盛りの女の子たちの群れ」	46	16	9	72
	心理、行動、態度面での固定観念を表すもの	「肝っ玉かあちゃんならぬ、肝っ玉ねえちゃん」「女性としての繊細な生き方や考え方」「女性らしい優しさにあふれた作風」「成熟した女の魅力」「色気漂うしぐさ」「作品には女性の感覚が濃密にあふれる」「内気で頑固で可愛げがなく」「女の子は大概、純真で優しく献身的だ」「強さが烈女を思わせる」「料理下手の新妻」「かわいらしさを失わず、強い意思と情熱で社会と渡り合う女性」	33	17	15	65
	その他、女性に関する記述	「エコノミスト業界の清少納言、浜矩子さん」「パンダ好きの女性は多い」「新たな戦闘の激化は女性や子どもをも盾にしかねない」「妻であり息子三人の母である日常から社会や宇宙のことまで毎日の記述は多岐にわたり」「入局5年目で、看板番組の“看板娘”に抜てきされた。ただし既婚」	17	16	6	39
小 計			96	49	30	176
母親に関して(母親らしさ)	女性とは母になるとの前提に立つもの	なし	0	0	0	0
	心理、行動、態度面での母親の固定観念を表すもの	「連絡ノートを開くときの胸のときめきは働くママの特権」「母の包容力」「母の愛情の深さを物語るエピソード」「愛情あふれる母の本音」「育児に自信が持てない母親」「子育てが初めての母親」「冷たくなっていく子どもを抱えて離さない母親の悲しみ」「母は女手一つで三人の子を育てるのに夢中で…」「母乳育児だけでなく、育児全般に疲れた母親が1日ゆっくりできる『戻りお母さん』というシステムもある」「優しい日本の母さん」	34	8	13	55
	その他、母親に関する記述	「妻であり息子三人の母である日常から社会や宇宙のことまで毎日の記述は多岐にわたり」「社会福祉士、保育士の資格を持ち、二児の母でもある森木さん」「女性も珍しくは無い。秋田県角館町では、高校生二人の母親、佐々木ひとみさん(46)が人力車を引く」「後半の走りは男子をしのぐほど脅威的だった。4歳の女兒を持つ高橋と同じ29歳」「留守宅では「カレーライス攻めだった」と夫と息子はほやくことしきりでした」	2	1	1	4
小 計			36	9	14	59
主婦に関して	主婦の役割に関する記述	「サラリーマンの夫に扶養されている主婦」「意外にもデジタル機器に人気が集めた。用途も買い物だけでなくレジャーへの要望が高く男性の志向と変わらない」「食事で家族をあきさせないよう、作る自分もあきないように」「主婦は政治が分からない、関心がない」「大統領は、料理やその他の家事をしなくてはならないし、『大統領であると同時にファーストレディだ』と語った」	5	2	1	8
	その他	「一人に障害があり、妻は働きにはでられない」「家で土産を待つ奥方たちもちょっぴり興奮しているかもしれない」「献身的な妻」「女性警察官で構成されるメトロポリタン・カラーガードも登場し、花を添えた」「一年中、発情する女性もいるようだから」	4	6	6	16
合 計			141	66	51	259

えちゃん。……ハスキーな声とおおらかな人柄が、たくましい女性を連想させる。が、ひとたび彼女の歌の世界に触れると、女性としての繊細な生き方や考え方を、リアルに感じることができる」(毎日、一〇月六日夕刊)と紹介されている。ここからみえてくるのは、彼女の個性が通俗的な表現の中に回収されていく様子である。つまり、彼女のおおらかさやたくましさは「肝っ玉」の範囲の中であり、さらに、単におおらかでたくましいだけではなく「女性としての」繊細さを併せ持つことが付け加えられているのである。

また、同じようなタイプの表現例として、二〇〇一年に死去した画家の秋野不矩の追悼記事では、彼女の画風を「旧来の日本画のイメージを超えた、雄大で骨太」と評しながらも、一方で「女性らしい優しさにあふれた作風」というように、ここでも追加的に「女性らしさ」が強調されている(朝日、一〇月二一日夕刊)。この他、「成熟した女の魅力」(毎日、一〇月一日)、「色気漂うしぐさ」(毎日、一〇月五日)のような、性的魅力に関するステレオタイプな文章も、数は少ないながらもみられる。

女性一般に関するその他のステレオタイプの表現は、計三九件みられた。例としては、「エコノミスト業界の清少納言、浜矩子さん」(朝日、一〇月六日夕刊)などをあげることができる。「清少納言」という名を使って、「才色兼備」であることを伝えたいのだろう。たまにみかける「決まり文句」である。「パンダ好きの女性は多い」(読売、一〇月一日夕刊)といったような「決めつけ」も、あまりに紋切り型だ。男性の「パンダ好き」や女性の「パンダ嫌い」はおかしい、ということなのだろうか。

ステレオタイプに関する古典的な論究で有名なウォルタ・リップマンは、「われわれはたいいの場合、見てから定義しないで、定義してから見る。外界の、大きくて、盛んで、騒がしい混沌状態の中から、すでにわれわれの文化がわれわれのために定義してくれているものを拾い上げる。そしてこうして拾い上げたものを、我々の文化に

よってステレオタイプ化されたかたちのままで知覚しがちである⁽²¹⁾と述べている。私たちは「女性」というだけで「繊細」で「魅力」「色気」があり、「パンダ好き」であると判断停止して断じ、本来多様であるはずの当該者を枠の中にはめ込み、それがまたジェンダー文化のリアリティを形成していくのである。

(2) 「母親らしさ」「主婦役割」の強調

表30中段の「母親らしさ」を強調するステレオタイプ表現は、心理、行動、態度面に関するものが五五件、その他の母親らしさに関するものが四件、合計五九件みられた。女性は母になるものという前提に立った表現は、今回はゼロ件であった。

これを三紙別にみると、心理、行動、態度面での母親ステレオタイプ表現は、朝日で三四件と最も多く、これに対し毎日では八件、読売では一三件みられた。例としては、「連絡ノートを開くときの胸のときめきは働くママの特権」(朝日、一〇月三日夕刊)、「お母さんの手作り料理」(朝日、一〇月一五日夕刊)、「母の包容力」「母の愛情の深さを物語るエピソード」(毎日、一〇月三日)、「予防接種については副反応に不安を持つ母親も少なくない」(読売、一〇月一日)、「愛情あふれる母の本音」(読売、一〇月一三日夕刊)など、子どもに注ぐ愛情や、子どもを育てる母親のたくましさや強調した表現が多い。また、母親が子育てや家事を担うものとの性別役割分業観を前提にしている記述として「育児に自信が持てない母親」「子育てが初めての母親」(朝日、一〇月一二日)といった記事などをあげることができる。

その他の母親らしさに関する言及としては、米国の心理学者の著書についての記事で、「母親から『愛されている』と感じることなく成長し、立派な主婦、母親であろうとして苦しんだ」「考えると、自分も母親に抱きしめら

れた記憶がなかった」(朝日、一〇月三日)といった記述をあげておこう。母は子どもを愛するものというステレオタイプをそのまま踏襲する記事として、場合によっては母親のストレスや苦しみを増しかねないところがある。

また「社会福祉士、保育士の資格を持ち、二児の母でもある森木さん」(読売、一〇月五日)という記事や、「妻であり息子三人の母である日常から社会や宇宙のことまで毎日の記述は多岐にわたり」(毎日、一〇月一四日)といった記述などは、「母親なのにそのマルチぶりは凄い」ということを言いたいのだろうか、そういう発想自体に、母親は子育てをすることが前提であるとの認識がうかがえる。同様の考え方は、たとえば「秋田県角館町では、高校生二人の母親、佐々木ひとみさん(45)が人力車を引く」(朝日、一〇月四日夕刊)、「後半の走りは男子をしのぐほど驚異的だった。4歳の女兒を持つ高橋と同じ29歳」(朝日、一〇月九日)などの記事にも看取できる。

「主婦役割」を強調する記事は、合計八件みられた。厚生労働省の論点整理を紹介する「主婦の年金6案を提示」と題する記事では、「サラリーマンの夫に扶養されている主婦の年金について議論」(朝日一〇月四日)と、家事専従の無職の妻を「主婦」ということばでくくり、しかも会社に勤務して働く夫をくくる「サラリーマン」ということばと対置させている。年金や保険に関する記事の典型的な文章と言うことができよう。「主婦もカーナビ欲しい」という小さな記事は、厳密には家事専従の女性というよりも「女性の既婚者」にアンケートを行った記事であるが、その結果を「意外にもデジタル機器に人気集中した。用途も買い物だけでなくレジャーへの要望が高く男性の志向と変わらない」(毎日、一〇月五日)と決めつけた販売者側のコメントをそのまま載せている。この記事は、女性は職業を持っていようがいまいが結婚すればみな家事育児役割の第一義的責任者として「主婦」と呼ばれるという、日本社会における女性のありようを典型的に表現していると同時に、「主婦」は男性と異なりデジタル機器に弱く、買い物好きだが、レジャー志向ではないという前提があるかのようなようである。

ただ、中には「このところの子供たちの問題も、母親が家族の食事に心を砕く姿を見せているか、……それが大切」との談話を紹介したそのすぐあとに「もちろん、それが母親ではなく父親でもいいのですけれど」との談話を付け加え、バランスをとろうとする言及もみられる(朝日、一〇月五日夕刊)。

表30最下段、その他の女性に関するステレオタイプ表現の例としては、リストラされた男性を取り上げた記事の中で、その家族構成を「妻(38)と小学生の長女ら娘三人がいる」と紹介したのちに「一人に障害があり、妻は働きにはでられない」と付け加え、障がいを持つ子どものケアは女性が担うことが当然であり、そのために女性が働きにでられないことは仕方がないと認識しているとおぼしき記事をあげておこう(朝日、一〇月一二日)。また、カツオやイナダなど秋の「青物」釣りを紹介する記事では、旬の魚の回遊には海鳥や釣り人、釣り船の船長までもが興奮させられると言ったのちに「家で土産を待つ奥方たちもちょっぴり興奮しているかもしれない」と冗談っぽくつけ足された文章にさえ、家で夫の帰りを待つ妻というイメージが通俗的に表現されている(毎日、一〇月三日夕刊)。

さらに、「男性にとって最大の不幸は、自ら経営していた『会社の倒産』であり、女性にとって最大の不幸は『離婚』ということができません」(読売、一〇月一〇日)や、「女性だったら誰でも思い当たる母と娘の関係」(読売、一〇月九日夕刊)という決めつけ、「献身的な妻」「女性警察官で構成されるメトロポリタン・カラーガードも登場し、花を添えた」といった定型的表現なども、読者に対して女性に関する固定的イメージを植えつけかねない可能性をはらんでいる。

(3) 男性に関するステレオタイプ表現

一方、男性に対するステレオタイプ表現は、「男らしさ」が計八一件、「父親らしさ」が一九件、「夫役割」ゼロ、

「その他」が五件で、合計すると一〇五件であった。記事例を入れた分類カウントは表31のとおりである。

表上段の「男らしさ」を強調する一六件の表現のうち、容姿・服装など外見について述べるものとしては、ロックミュージシャンへのインタビュー記事で「よれよれのネクタイ、ぼさぼさの前髪、ななめに構えてインタビューに気さくに応じる」(朝日、一〇月一日夕刊)、アルペンスキーヤーへのインタビュー記事で「長野のところに比べてがっちりたくましくなって」(朝日、一〇月三日夕刊)などが例としてあげられる。また、「まだあどけなさの残る18歳のアブドル・バシル君」(朝日、一〇月一日夕刊)といった容姿に言及する記述もみられた。

最多の六二件を占める「男らしさ」に関するステレオタイプ表現のうち、心理、行動、態度面での固定観念をあらわす表現が、朝日の三八件を筆頭に、毎日一六件、読売八件みられた。男性の心理、行動、態度面におけるステレオタイプ表現としては、「男性は『恐妻ネタ』が共通してうける」「男は△鎧が重たい▽という弱音を女にはけぬ、見栄っ張り精神があるのだ。弱音は男同士のもの」(朝日、一〇月一日夕刊)、「男泣き」「男の勲章」(朝日、一〇月二日)、「男心」(朝日、一〇月六日夕刊)、「彼のようにクールで論理的な思考をする人に共感を覚えてしまいうのだ」(朝日、一〇月九日夕刊)、「持ち前のガッツと腕っ節の強さがものをいったのではないか」(朝日、一〇月一二日)、「受け入れられるだけの度量のある男」「若者に媚びない戦中派の男の生きざま」(毎日、一〇月一日)、「『八方破れの度胸』で仕事に励む男たち」(毎日、一〇月三日)、「男の意地」(毎日、一〇月四日)、「男の気丈さ」「男気の登板」(読売、一〇月一日夕刊)、「男の強さを信奉する彼ら」(読売、一〇月九日)、「男とは? たずね返した記者に松井は続けた。『いさぎよさっていいのかな。批判されても『自分は何を言われてもかまわない』っていう態度だね』」(読売、一〇月九日夕刊)などをあげることができる。おおむね、腕力的・精神的な「強さ」に関する表現と、「弱さ」を隠し「強さ」の見栄をはるための「空いばり」の心理や行動などが表されているとみること

表 31 男性のステレオタイプ表現

(単位:件)

		記事例	朝日	毎日	読売	合計
男性一般に関して(男らしさ)	男性について容姿・服装など外見を詳しく述べるもの	「よれよれのネクタイ、ぼさぼさの前髪、ななめに構えてインタビューに気さくに応じる」「がっちりたくましくなって」「まだあどけなさの残る18歳のアブドル・バシール君」「大きくて強い男らしさ」「男性の場合、スーツに合わせて持つ機会が多いので」「男性ならネクタイをさせる」	13	1	2	16
	心理、行動、態度面での固定観念を表すもの	「男は<鎧が重たい>という弱音を女にはけぬ、見栄っ張り精神があるのだ」「男性は『恐妻ネタ』が共通してうける」「男泣き」「男の勲章」「男心」「彼のようにクールで論理的な思考をする人に共感を覚えてしまうのだ」「持ち前のガッツと腕っ節の強さがものをいったのではないか」「受け入れられるだけの度量のある男」「若者に媚びない戦中派の男の生きざま」「八方破れの度胸」で仕事に励む男たち」「男の意地」「男の気丈さ」「男気の登板」「男の強さを信奉する彼ら」「男とは?たずね返した記者に松井は続けた。『いさぎよさっていうのかな。批判されても「自分は何を言われてもかまわない」という態度だね。』「もう男として引き下がれない」「銃を持たなければ、一人前の男といえない」「弱音は男同士のもの」	38	16	8	62
	その他、男性に関する記述	「酒豪ぶりも親ゆずりだった」「下ネタの仲」	3	0	0	3
小 計			54	17	10	81
父親に関して(父親らしさ)	男性は父になるとの前提に立つもの	なし	0	0	0	0
	心理、行動、態度面での父親の固定観念を表すもの	「お父さんの包容力のある男性」「妻に『何かあったら子供のことを頼む』と話し、子供の寝顔を見て出発した」「おやじよ、生きざまを語れ」「まるで、父親が息子に一つ一つ教えるように」「雷おやじ」「やさしいけれど怒るとこわいそんな『お父さん』」「お父さんたちが“命”をかけているあのビデオ撮影」「男も悩む育児か会社か」「父は仕事に忙しく」「父親譲りのスケールの大きな芸風」	9	9	1	19
	その他、父親に関する記述	なし	0	0	0	0
小 計			9	9	1	19
夫関係に	夫役割に関する記述	なし	0	0	0	0
	その他	「男の勲章」「色気のある落語家」「華麗な調子に透き通るような声、色気漂うしぐさ」「色気のある二枚目」	3	2	0	5
合 計			66	28	11	105

ができよう。なかんずくスポーツ面での記事に目立つようだ。

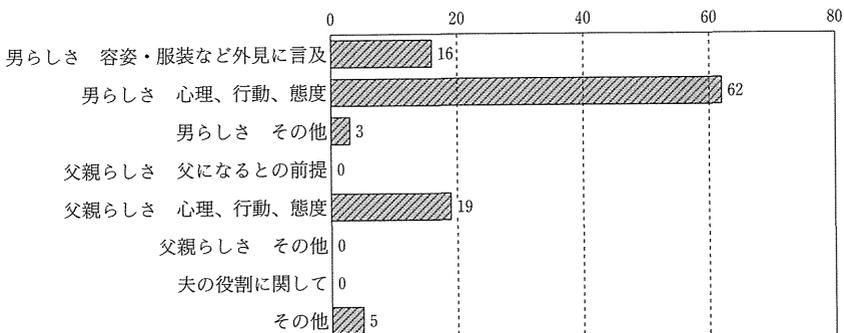
その他の「男らしさ」に関する記述としては、「酒豪ぶりも親ゆずりだった」(朝日、一〇月三日)、「下ネタの仲」(朝日、一〇月三日夕刊)があげられる。酒と性への関心が「男らしさ」の象徴としてあらわれたかっこうである。

表 31 中段の「父親らしさ」を強調する表現は、一九件全てが心理、行動、態度面におけるステレオタイプ表現であった。具体的には、「お父さんの包容力のある男性」(朝日、一〇月一日夕刊)、「妻に『何かあったら子供のことを頼む』と話し、子供の寝顔を見て出発した」(朝日、一〇月六日夕刊)、「おやじよ、生きざまを語れ」「まるで、父親が息子に一つ一つ教えるように」「雷おやじ」(毎日、一〇月一日)、「やさしいけれど怒るとこわいそんな『お父さん』(毎日、一〇月三日)、「お父さんたちが『命』をかけているあのビデオ撮影」(毎日、一〇月五日)、といった表現があげられる。

「包容力」「責任感」といったバターナリスティックな性質、そして「強さ」「怖さ」といった家父長的な性質を表す表現が目立つと言えよう。

その他男性に関する強調表現としては、「男の勲章」(朝日、一〇月二日)のような定型的表現もみられたが、「色気のある落語家」(朝日、一〇月二日)のような、通常は女性に使われることの多い「色気」ということばを男性に用いている点が目につく。

男性のステレオタイプ表現

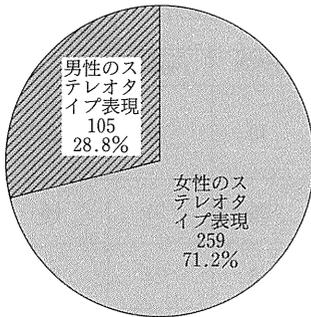


(4) ステレオタイプ表現の経年変化

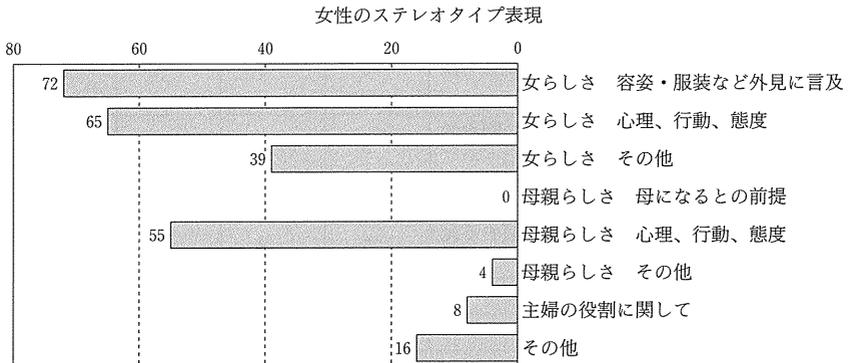
女性に関するステレオタイプ表現と男性に関するステレオタイプ表現の比率は、グラフ13に示したように、およそ七対三であり、女性の方がより紋切り型に表現される実態がある。グラフ14は、女男別にステレオタイプ表現の内訳を示したものである。心理、行動、態度の面では、女性と男性はほぼ同じ頻度でステレオタイプ表現の対象となっているが、女性は男性に比べて容姿や服装などに言及される傾向が非常に強く、また、母親らしき心理、行動、態度についても言及される頻度が高い。総じて、女性が容姿・服装の面、心理、行動、態度の面、あるいはその他の女らしさや母親らしき、主婦役割など多様な局面において紋切り型の表現をされる傾向があるのに対し、男性の場合は、ステレオタイプ化されて表現されずとも、もっぱら心理、行動、態度面での男らしさに言及される傾向がある。これを、女性と男性とで異なる規準があてはめられた、一種のダブルスタンダード表現とみることもできるだろう。

女性、男性に対するステレオタイプ

グラフ13 ステレオタイプ表現の女男比 (3紙合計)



グラフ14 ステレオタイプ表現の女男別内訳 (3紙合計) (単位: 件)



イブ表現数の経年変化をみたのが、表 32 である。女性に関するステレオタイプ表現全体は、一九八五年三九九件、九一年七六件、九六年一五四件、二〇〇一年二五九件と推移しており、必ずしも明確な傾向はつかみにくい。しかしながら、その中の「主婦役割」に関する記述は、確実に減つていると言えそうである。

男性に関するステレオタイプ表現は、九六年と二〇〇一年の二回にわたる集計・分析を行っているが、表 33 のように、六四件から一〇五件へと増加している。中でも「男らしさ」に関して心理、行動、態度面での固定観念をあらわすもの、「父親らしさ」に関して心理、行動、態度面での固定観念をあらわすものが増えているようだ。

女性に対するステレオタイプ表現は増減しつとも根強く存在し続け、一方、男性に

表 32 女性のステレオタイプ表現の経年比較 (3 紙合計)

(単位：件)

		1985年	1991年	1996年	2001年
女性一般に関して (女らしさ)	女性について容姿・服装など外見を詳しく述べるもの	77	19	39	72
	心理、行動、態度面での固定観念を表すもの	119	26	31	65
	その他、女性に関する記述	49	5	24	39
小 計		245	50	94	176
母親に関して (母親らしさ)	女性は母になるとの前提に立つもの	3	0	0	0
	心理、行動、態度面での母親の固定観念を表すもの	66	3	8	55
	その他、母親に関する記述	5	4	5	4
小 計		74	7	13	59
主婦に関して	主婦の役割に関する記述	75	8	13	8
その他		5	11	34	16
合 計		399	76	154	259

対するステレオタイプ表現は、増してきているように感じられる。今後さらに経年比較を継続しないと正確なところはわからないが、新聞が、ジェンダーに関し、対象性別にかかわらずく定型的な表現をする傾向が、このところむしろ強まっているようにもみえるのである。

リップマンは、ステレオタイプについて、馴染みの認知パターンにあてはめることによって思考の手間を省く「経済性」を指摘している⁽²²⁾が、それに加えて、人びとが既存の社会に適応して自己の地位を保全するための「防衛装置」であるとも指摘している⁽²³⁾。女性や男性に対する偏見、恐怖、願望、好みなどの感情をすくいあげ、認知レベルや社会関係レベルで安心立命を得るシステムとして、ステレオタイプ表現が機能している。そのようにしていったん貼られたレッテルは、さらに、女性や男性に対する偏見、恐怖、願望、好みなどの感情を連鎖的に生

表 33 男性のステレオタイプ表現の経年比較 (3紙合計)

(単位: 件)

		1996年	2001年
男性一般に関して (男らしさ)	男性について容姿・服装など外見を詳しく述べるもの	18	16
	心理、行動、態度面での固定観念を表すもの	23	62
	その他、男性に関する記述	11	3
	小 計	52	81
父親に関して (父親らしさ)	男性は父になるとの前提に立つもの	0	0
	心理、行動、態度面での父親の固定観念を表すもの	0	19
	その他、父親に関する記述	3	0
	小 計	3	19
夫役割に関して	夫役割に関する記述	4	0
	その他	5	5
合 計		64	105

*1985年…男らしさに関するもの48件

父親らしさに関するもの: 12件

働き手としての役割を強調するもの: 9件

その他: 3件

*1991年…男性・父親のステレオタイプ: 10件

男性の容姿や態度・心理への言及: 7件

み出してゆくことになるだろう。新聞という、公共的で日常に根を下ろした権威あるメディアがこのような表現を使い続け、読者の「思考の節約」ばかりを促し続けることになれば、本来豊かなはずの個人や文化の多様性は、広がりを持たなくなってしまう。「女性であることの強調」をはじめとする性の違いに関するステレオタイプに基づく表現は、ジェンダーをも含めて多文化化する社会の中で、見直しが迫られている。

II 女性隠し表現の動向

6 女性を社会の表面から隠蔽する表現

(1) 男性を世帯・家族の代表とする表現

これまでみてきたのは、女性であることが紙面上でことさら強調される表現がいかにかに多いかについてであった。ところが新聞には、その逆に、女性が紙面に登場させられずにその存在が背後に隠されてしまう「女性隠し」の表現もある。

たとえば、事件・事故などに際し人名が報道される場合、当事者が属している世帯・家族単位で報道することが新聞記事の定型となっている。その場合、女性の名が世帯・家族の代表者として用いられ、記載されることはほとんど稀であるという実態がある。女性は、このような記事表現の方法によって、往々にして社会的代表性を剝奪され、その姿を隠されてきたのである。

そうした「女性隠し」表現としては、火災や交通事故といった事件・事故などで人物名が報道される際に、「○Aさん方」(○印は姓、Aなどアルファベットは名をあらわす)などと世帯名で報じられ、その○部に入る姓が男性名であることが多い事態にその典型をみることができるといえる。

今回男性名によつて世帯を代表させる表現がされている記事は、表34上段に示したように一八件みられた。具体的な記事としては、放火の疑いがある連続不審火事件の「老人ホーム職員、*野*志さん(45)方の火災」(毎日、一〇月一三日夕刊)といった記事や、母親の折檻によつて七歳児を死亡させた記事での「水*さん方は妻と知*ちゃんのほかに次男と長女、祖母の7人暮らし」(朝日、一〇月一三日)という記事、また事件ではないが「シナリオライターの*村*文さん(44)夫妻は」(読売、一〇月九日)などである。

火事の記事での「老人ホーム職員」の「*野*志さん」には、妻もいるだろうし、その妻も勤め人かもしれない。ほかの家族もいるかもしれない。にもかかわらずこれらの人びとが全て「*野*志さん」という男性に集約されてしまっているのである。また、折檻死の記事は、事件の当事者・容疑者はこの母親であるにもかかわらず、男性に付随した女性、つまり「水*さんの妻」として扱われ、男性主体の背後に隠されてしまっている。

こういった「女性隠し」の表現に対して、女性が世帯や家族の代表として扱わ

表34 家族・親・夫婦の代表

(単位: 件)

		朝日	毎日	読売	合計
家族 (「○Aさん方」 の○Aに入る個人名)	男性	4	10	4	18
	女性	0	0	0	0
親 (「○Bさんの長女」 の○Bに入る個人名)	男性	2	5	4	11
	女性	1	0	0	1
夫婦	「○Cさんの妻」という表現	38	33	13	84
	「○Dさんの夫」という表現	4	3	4	11

* ○〈マル印〉は姓、Aなどアルファベットは名を表す

れる、○部に女性名が入るケースはゼロ件であった。

また、表 34 中段に示したように、子どもについて報じる記事で「○Bさんの長女」のように保護者が言及されるもののうち、男性名が保護者を代表するケースは、「*部*茂さんの長男、智*ちゃん」(毎日、一〇月七日)などのように一事件だったのに対し、女性が親を代表するものは、車を運転していた母親ともども子どもが事故死したことを報じる記事(毎日、一〇月一四日)一件にとどまった。子どもの親としての女性の姿もまた、紙面から隠されているのが実状である。

(2) 男性の姓名に付随して表現される女性の名

既婚女性は、独立した個人として姓名で表現されることはほとんどなく、「○C(姓十名)さんの妻Dさん」といったように、夫のフルネームのあとに名のみで記述される場合が多い。女性が事件・事故の当事者である時でさえ、夫婦の場合は、夫が「主」であり、妻は姓を省略され「従」として扱われるのである。

こういった、主体であるはずの女性が夫の後ろに付随させられる表現は、表 34 下段にみられるように朝日で三八件、毎日で三三件、読売が一三件の合計八四件みられ、たとえば埼玉医大病院への損害賠償を求める訴訟をおこした「評論家船瀬俊介さん(51)と妻睦子さん(44)」(朝日、一〇月六日夕刊)といった記事があげられる。「寺*祐*くんの父、*介さんと妻の*澄さん」(朝日、一〇月一三日夕刊)という記述や、「須*恵*(29)と妻、美*子(23)」(毎日、一〇月一日夕刊)などの表現も、女性・妻を、一人の姓名をもった社会的に独立した個人として扱わず、男性・夫に付随する存在として描写する例である。先の折檻死の事件も、最初の方の記述は夫の名がフルネームで記され、妻(母)の方は「家にいた志*子容疑者(34)がせっかんしたとして」のように下の名のみで扱

い、さらに続く記述においても「志*子容疑者は殴ったことを認めているという」と、やはり名のみを記載していた。

それに対して、「○Dさんの夫Cさん」のように女性の姓名に男性の名が「夫」として付随するケースは一件みられた。たとえば、妻が夫の殺害を第三者に依頼した保険金殺人事件は、「宮城県……の会社員が多額の保険金をかけられて殺害された事件で、殺人容疑で逮捕された妻の保険外交員田口*ゆみ容疑者(39)」で始まる記事だが、女性が姓名で報じられたのち、第三者に「夫の*芳さん(当時38)の殺害を持ちかけた」という記述となっている(朝日、一〇月九日)。しかしながら、こういった男性の名が女性の姓名に付随する記述は、ごくわずかであり、女性の八分の一以下である。

中村桃子は、これら女性の男性に対する従属的な表現を支えているのが、女性を所有物とみなす思想であるとしている。すなわち中村は、このような表現について、「『女は男の所有物だ』と考えられているために、女に関する記述には男との関係が不可欠となる。所有者をはっきりさせなければ人物が確定できないと感ぜられるからだろう」と指摘し、家庭の中での妻の夫への従属に加え、子(息子)への従属の形も存在することを示している。⁽²⁴⁾

かつて儒教には「家にあつては父、嫁いでは夫、夫の死後は子に従え」という三従の教えがあつた。現在、この表現自体が使われることはほとんどないが、核となる思想は、前述した他者との関係で表されることばやここでみた従属表現として残存していると言えよう。

(3) 「女性隠し」表現の経年変化

表35から過去三回の調査結果を時系列比較でみると、「家族の代表」として男性名が入るケースは一九八五

年五〇件、九一年四件、九六年六件、そして二〇〇一年一八件と推移してきている。一方、女性名が入るケースは、八五年一件、九一年ゼロ件、九六年三件、二〇〇一年ゼロ件と、男性名が代表するケースが常に大多数である。女性名が入ることはほとんどないことも各年で共通している。しかしながら、男性名が家族を代表する記述は、二〇〇一年にはやや増加したものの、九〇年代以降大きく減ったと言えそうである。

同様に、「親の代表」として男性名が入る記事をみると、八五年一件、九一年一三件、九六年六件、二〇〇一年一件と推移してきた。こちらの方は、増減しながらも、ほとんど変化がないとみることができ。女性名が入る事例は、八五年ゼロ件、九一年ゼロ件、九六年一件、二〇〇一年一件と非常に稀である点にも変化はない。

一方、夫婦の場合に「夫が代表」するケースは、八五年一六件、九一年三〇件、九六年二二件と増減を繰り返していたが、二〇〇一年は八四件の多きを数えた。ただし、夫婦で「妻が代表」する記事も八五年のゼロ件から、九一年一件、九六年五件、二〇〇一年一件と、増加傾向がみられる。

以上の経年比較の結果から、家族の代表として男性が前面に出、その背後に女性が見られる表現は減っているものの、親や夫婦を男性が代表し、女性がその陰に隠れるという表現はいまだに減る様相をみせていないと言えるだろう。

表 35 家族・親・夫婦の代表の経年比較

(単位：件)

		1985年	1991年	1996年	2001年
家族 (「○A さん方」の○A に入る個人名)	男性	50	4	6	18
	女性	1	0	3	0
親 (「○B さんの長女」の○B に入る個人名)	男性	11	13	6	11
	女性	0	0	1	1
夫婦	「○C さんの妻」という表現	16	30	22	84
	「○D さんの夫」という表現	0	1	5	11

※ ○ <マル印> は姓、A などアルファベット は名を表す

III ダブルスタンダード表現の動向

7 敬称の性別による使い分けにみるダブルスタンダード

(1) 同一記事中にみられる女性には「さん」、男性には「氏」の使い分け

紙面上に登場する人物には、人物名のあとに肩書がつく場合やスポーツ選手の名前などいくつかの場合を除いて、基本的に敬称が付される⁽²⁵⁾。その際女性の敬称には「さん」を、男性の敬称には「氏」を使い分ける傾向が強い。フォーマルで権威的印象を与える「氏」を男性に対して、より日常的で親近感はあるが権威は氏より下との印象を与えがちな「さん」を女性に対して使い分ける仕方は、新聞におけるダブルスタンダード表現の典型である。

こうしたジェンダー間での敬称の使い分けを比較検討するために、記事中における人物の登場パターンを二通りに分類した。第一は、一つの記事の中に女性と男性の両方が登場する場合、第二は、一つの記事の中に女性または男性のどちらか一方のみが登場する場合である。前者については記事ごとに女男に対する敬称の使い分けを比較し、後者については登場人物に付される敬称を全て拾い上げ、女男別に分類・集計をした。

まず、表36の上位に示されているように、同一記事中に女性と男性が登場する場合に、女性には「さん」、男性には「氏」を使い分けたものは、七件みられた。たとえば、朝日一〇月一〇日の天声人語は、米国の攻撃したアフガニスタンが世界の注視を浴びている状況について述べ、バーミヤンの仏像やタリバーンについてふれた文章であるが、その中で「前国連難民高等弁務官の緒方貞子さん」を「さん」づけで紹介する一方、同一記事中のイラン人

の映画監督に対しては「モフセン・マフマルバフ氏」と「氏」を用いて紹介している。また、毎日一〇月一三日のアフガニスタンの飢餓状況に関する討論会についての記事では、会議のパネリストの作家を「辺見庸氏」と紹介しているのに対し、同じパネリストの脚本家は「小山内美江子さん」と紹介している。

また、女子には「ちゃん」「さん」、男子には「君」など子どもに対する性による呼称の使い分けを含む「その他の使い分け」は一三件を数えた。したがって、女性と男性で名前に付される敬称・呼称

表 36 一般記事における敬称の使われ方

(単位: 件)

			朝日	毎日	読売	合計
同一記事中に女男 両方が登場	女・男で 使い分け	女性「さん」/男性「氏」	5	1	1	7
		女性「女史」/男性「氏」	0	0	0	0
		その他の使い分け	6	4	3	13
	小 計		11	5	4	20
	女男とも 同敬称	女性「氏」/男性「氏」	15	12	10	37
女性「さん」/男性「さん」		55	36	57	148	
その他の同じ敬称		1	3	3	7	
小 計		71	51	70	192	
その他・不明		3	2	4	9	
同一記事中に 一方の性が別 敬称で登場	女性別敬称	「氏」「さん」	0	1	0	1
	男性別敬称	「氏」「さん」「クン」「君」「ちゃん」	15	16	10	41
	小 計		15	17	10	42
同一記事中に一方の性が単一敬称で登場	女性単独使用	女性「氏」	27	15	8	50
		女性「女史」	1	0	0	1
		女性「さん」	222	269	302	793
		女性その他	23	7	10	40
		女性ニックネーム	1	8	15	24
	小 計		274	299	335	908
	男性単独使用	男性「氏」	800	650	591	2041
		男性「さん」	581	642	632	1855
		男性その他	26	28	12	66
		男性ニックネーム	6	14	8	28
小 計		1413	1334	1243	3990	
(オサマ・ビンラディン氏)		(360)	(433)	(0)	(793)	
不 明		1	2	1	4	

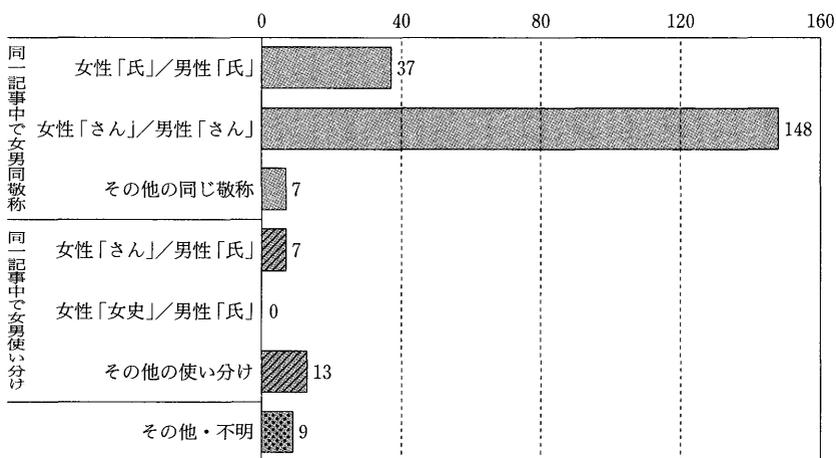
が異なるケースは合計で二〇件となる。今回、女性には「女史」、「男性には「氏」という使い分けはみられなかった。

次に、表36中段に示したように、同じ記事の中に女性と男性が登場し、かつその敬称を使い分けていない場合として、女男ともに「氏」を用いた記事は三七件、「さん」を用いた記事は一四八件、また子どもに対する呼称(「ちゃん」など)を含む「その他の同じ敬称」を用いた記事は七件で、合計一九二件みられた。同じ記事中で敬称を使い分けられない件数と、使い分けている件数を示したのがグラフ15である。

なお、同一記事中に複数の女男が登場し、敬称の使い分けが行われている場合に、それがジェンダーによるのか、または他の要因によるのか判断としないものがあつたので、「その他・不明」に分類し、合計で九件が数えられた。ちなみに、女性に「氏」、男性に「さん」を付した敬称の使い分けはみられなかった。

以上みてきたように、同じ記事の中で女男の敬称を使い分けるケースは、敬称を使い分けられないケースに比べて確かに少ない。しかし、女性には親しみやすい印象を与える「さん」を、

グラフ15 同一記事中における敬称・呼称の使われ方 (3紙合計) (単位: 件、N221)



男性には公的で権威的な印象を与える「氏」を使い分ける傾向は、少ないながらもいまだに続いている。

今回の調査では、記事中に登場する複数の同性に対して、また複数回登場する同一人物に対して異なる敬称が付された場合も併せてカウントした(表 36 中段)。その結果、女性は一件、男性は四一件が数えられた。内訳は(表は省略)、登場する人物の社会的地位や知名度によって敬称を使い分けたものが一三件、地の文とそこに挿入された会話文とで敬称を使い分けたものが八件、大人と子どもで敬称を使い分けたものが八件、その他であった。

(2) 単独出現の場合にみられる女性には「さん」、男性には「氏」の傾向

一つの記事の中に女男のどちらか一方が登場する場合については、それらの人びとにつけられた敬称を女男別にすべてカウントした。これを集計したものが表 36 の下段である。今回の調査時期は、九・一一米・同時多発テロの直後であり、また、一〇月七日に開始された米英軍によるアフガニスタン攻撃時期と重なったため、特定の個人名である「オサマ・ビンラディン氏」の出現頻度が七九三件と突出していた。本来「オサマ・ビンラディン氏」は、男性名に敬称の「氏」をつけた場合として分類・集計するべきところだが、右に記した調査時の社会状況の特殊性により出現頻度が非常に多くなっていたので、例外として扱い、小計に数え入れなかった。ちなみに、新聞別に見ると、朝日、毎日「オサマ・ビンラディン氏」もしくは「ビンラディン」と、氏という敬称で統一していたのに対し、読売は「オサマ・ビンラディン」もしくは「ビンラディン」と、敬称なしの表記で統一していた。

まず、今回紙面調査を行った一五日間に、一つの記事中に女男のどちらか一方が「さん」または「氏」等の敬称つきで登場した回数の総計は、女性九〇八件に対し、男性三九九〇件である。女男の登場比率は一八・五%対八一・五%と、女性の登場者は全登場者の五分の一以下でしかない。確かに、ここで取り上げた数字は、記事中に一

方の性のみが登場し、「氏」や「さん」などの敬称がつけられている場合には限定されているが、以上の調査結果は、新聞におけるかなりアンバランスな女男の登場傾向を大枠において示唆していると言えるだろう。

次に、女男別に「さん」と「氏」の使用頻度をみると、グラフ16に示したように女性では「さん」が七九三件で八七・三%を占めているのに対し、「氏」は五〇件、五・五%と、「さん」が「氏」の約一六倍の頻度で用いられている。これに対し、男性の場合には、「さん」が一八五五件(四六・五%)に対し「氏」が二〇四一件(五・二%)と、その比率はおよそ一対一で、むしろ「氏」の使用頻度が「さん」の使用頻度をやや上回っている。

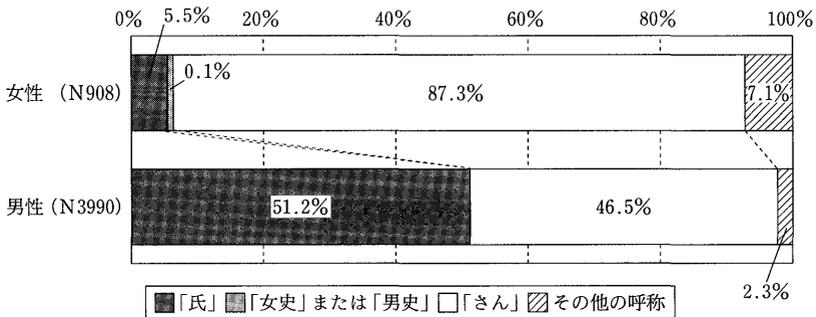
このように、男性と比べ女性に対しては、「さん」がつけられる度合いが圧倒的に高いのである。なお、女性名+「女史」は前回調査(一九九六年)の一〇件に比べて、今回は一件と少なくなっており、ほとんど使われない表現となってきたことがうかがえる。

(3) 紙面別にみた「さん」と「氏」の使われ方

—— 女性 は政治面以外では「さん」、男性はどの面でも「氏」

さらに、「さん」および「氏」という敬称が、新聞の各面で、女男に対してどのように用いられているかを調べてみた。グラフ17は、新聞紙面を、紙

グラフ 16 同一記事中に女男どちらかが単一敬称で登場する際の女男別敬称内訳 (3紙合計)

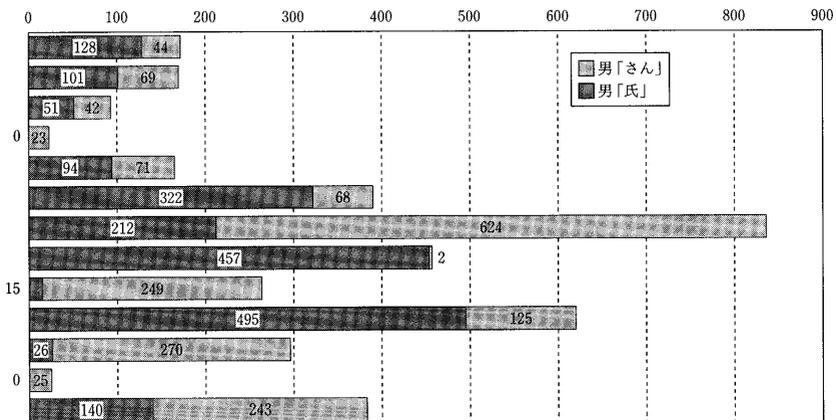


面欄外に記載された面名をもとに、① 1 面、② スポーツ、③ 科学、④ 教育、⑤ 経済、⑥ 国際、⑦ 社会、⑧ 政治、⑨ 生活、⑩ 総合、⑪ 地域（東京）、⑫ 地方自治、⑬ 文化・メディアの各面に分類し、「さん」「氏」の敬称がそれぞれの面の中で単独使用された場合の出現頻度を女男別に集計した結果である。

まず、このグラフにより、各面別に女男の出現傾向をみてみると、女性が登場する面は、「生活」を筆頭に、「教育」「地域（東京）」「文化・メディア」が中心であることがわかる。しかしながら、女性の登場回数が多い面である「生活」においても、女性の登場回数は男性の七割程度にとどまっている。これに比べ、男性の登場回数は、新聞のあらゆる面において女性を上回っており、とくに一面、スポーツ、科学、経済、国際、政治、総合、地方自治の各面ではその差が五倍以上に達している。

次に、登場した女性と男性に対する敬称の使い方に注目してみると、グラフ 17 からも明らかのように、まず女性では、ほとんどの面でも「さん」つきで呼ばれるのが一般的である。例外的に政治、経済、文化・メディア関連の記事で女性名+「氏」の使用がみられ、特に「政治」面では女性名+「氏」の使用が顕著で、二〇件中一七件

における敬称の使われ方 (単位：件)

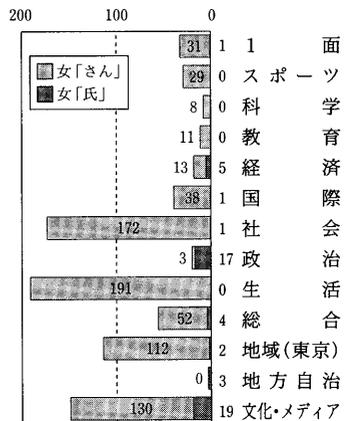


(八五・〇%)に達している。これは、公的で、社会的地位の高いと考えられる人物に対しては性別の如何を問わず敬称に「氏」が付されやすいという恰好の事例となっていると言えよう。ただし、それでも女性は、一〇〇%「氏」で呼ばれる男性に比べ、「政治」という公的な場所にあつてさえ「さん」で呼ばれることがより多いのである。また、男性の場合、「政治」以外にも、国際、総合、一面、スポーツ、経済、科学など、多くの面で、女性に対して使用される敬称とは対照的に、男性名+「氏」の使用が顕著となっていることが、グラフ17から読み取れる。ちなみに、文化・メディアにおける女性名+「氏」の使用は一九件数えられたが、これらのうち一件は「中国女性文学の新潮流」と題された朝日一〇月二日夕刊の同一記事中で使用されていたものである。

このように、記事中に女性か男性のどちらか一方が登場する場合は、第一に、男性の登場回数が圧倒的に多く、第二に、敬称の使われ方を女男別に比較してみると、女性には「政治」以外のどの紙面でも「さん」が多く用いられているのに対し、男性には教育、社会、生活、地域(東京)、地方自治以外の記事で「氏」が多く用いられている。各面への女性と男性の登場回数の差は、社会の特定の分野における女男の進出度を反映しているものであり、記者のバイアスを映し出しているのではない、との議論もあるだろう。しかし、ひとたびそれらの面に登場する人物につけられた敬称に目を向ける時、ジェンダーによる敬称の使い分けがはっきりと現れていることから、新聞の作り手側のジェンダーバイアスの存在が読み取れるのである。

以上でみてきたように、同一記事中に女男ともに登場する場合に敬称を使い分ける、いわばすぐ目につきやすい

グラフ 17 各紙面



ジェンダーによる敬称の区別は二〇件にとどまり、そう多くはない(表 36 上段)。しかし、一方で、記事中に女性が単独で出てくる場合の敬称の使われ方を一定の期間量的に集計し、男性と比較してみると、その違いがはっきりするのである(表 36 下段、グラフ 16、17)。

(4) 死亡記事における敬称の性別による使い分けの定型化

ここまでは一般記事中における性別による敬称の使い分けについて検討してきた。では、同一記事中に女性と男性が登場する機会の多い死亡記事において、敬称の使い分けはどうか。

表 37 は、同一死亡記事の中の女男に対する敬称の使われ方を類型化して示したものである。一般的に、死亡記事には死亡者と喪主が登場するが、まず、その区別をあえて考慮せず、さらに、第三者が登場する場合にはその敬称も含めて、登場する全ての人物の敬称使用を類型化した。調査期間中の死亡記事は合計一七八件あったが、朝日一〇月一四日朝刊において死亡男性に「さん」と「氏」の二種類の敬称が付されていた記事があったため、これを除外し、合計一七七件としてカウントした。毎日新聞は一九九九年一月一日から死亡記事の敬称を「さん」に統一しているが、これ以外の朝日、読売では、女性に対する敬称として「氏」を付すことを徹底して拒んでいるかのよ

表 37 同一死亡記事における敬称の使われ方

	朝 日		毎 日		読 売		合計	比率
	件数	比率	件数	比率	件数	比率		
女性「さん」/男性「氏」	31	58.5%	2	3.2%	39	63.9%	72	40.7%
女性「さん」/男性「さん」	0	0.0%	41	65.1%	0	0.0%	41	23.2%
女性名のみですべて「さん」	4	7.5%	1	1.6%	1	1.6%	6	3.4%
男性名のみですべて「さん」	1	1.9%	18	28.6%	0	0.0%	19	10.7%
男性名のみですべて「氏」	17	32.1%	1	1.6%	21	34.4%	39	22.0%
合 計	53	100.0%	63	100.0%	61	100.0%	177	100.0%

うな結果となった。一方、女性に用いられる敬称の「さん」が男性に用いられているかという点、朝日で一・九%、読売でゼロ%と、ほとんど用いられていない。このように、死亡記事の中では、女性には「さん」を、男性には「氏」をとっている。敬称の使い分けが行われ、定型化されている。

この表37では、死亡者と喪主の区別を考慮せず、登場人物につけられた敬称の類型化を行ったが、両者を区別し、さらに死亡者の社会的地位をも反映させたジェンダー間敬称比較を行ったものが表38で

表 38 女男別にみた死亡者と喪主に対する敬称の使われ方 (単位：件)

死亡者		喪主		朝 日						毎 日					
				喪主女性		喪主男性		記載なし	小計	喪主女性		喪主男性		記載なし	小計
				「さん」	「氏」	「さん」	「氏」			「さん」	「氏」	「さん」	「氏」		
死亡女性	「さん」	著名人	1	0	0	2	2	5	0	0	4	0	1	5	
		その他	0	0	0	3	4	7	0	0	6	1	1	8	
	「氏」	著名人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
死亡男性	「さん」	著名人	0	0	0	0	1	1	31	0	12	0	3	46	
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	
	「氏」	著名人	21	0	0	9	8	38	0	0	0	0	1	1	
		その他	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	
喪主敬称合計			23	0	0	14	16	53	31	0	25	1	6	63	

死亡者		喪主		読 売						合 計					
				喪主女性		喪主男性		記載なし	小計	喪主女性		喪主男性		記載なし	合計
				「さん」	「氏」	「さん」	「氏」			「さん」	「氏」	「さん」	「氏」		
死亡女性	「さん」	著名人	0	0	0	2	0	2	1	0	4	4	3	12	
		その他	1	0	0	7	1	9	1	0	6	11	6	24	
	「氏」	著名人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
死亡男性	「さん」	著名人	0	0	0	0	0	0	31	0	12	0	4	47	
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	
	「氏」	著名人	28	0	0	12	5	45	49	0	0	21	14	84	
		その他	0	0	0	5	0	5	1	0	0	5	1	7	
喪主敬称合計			29	0	0	26	6	61	83	0	25	41	28	177	

※喪主なし、喪主未定は「記載なし」に分類

ある。ここでは、死亡者と喪主に対する敬称の使われ方に注目したので、第三者が登場する場合は分析から除外した。

ここで注目すべき点は、死亡者として登場する男性は「著名人」本人であるのに対し、女性は「その他」(著名人の妻、母など)として登場していることである。死亡した男性が「著名人」本人であるのは、朝日でおよそ九五%、毎日九四%、読売九〇%であるのに対し、死亡した女性が「著名人」本人であるのは、朝日でおよそ四二%、毎日三八%、読売一八%であった。そもそも、死亡記事に死亡した女性が登場すること自体が少ないのだが、死亡者として登場する際にも女性は「○○の妻」「○○の母」など、男性との関係でその属性が表記される。つまり、「他者との関係」という記号をまもって登場しているのである。

(5) **男性は姓名、女性は名のみで表現**

女性と男性とであてはめる規程が異なるダブルスタンダード表現のもう一つの形として、男性は姓と名のフルネームで表記されるのに対して、女性は名のみで表記されるというものがある。姓が公的なものであるのに対して、名が私的なものであるとするならば、こうした表現には、女性を私的領域の人として閉じこめる発想があらわれていると言える。

そのような表現を集めたのが表39である。典型的なのは、男性がフルネームで女性

表 39 女性が名のみで表現されるパターン

(単位：件)

	朝 日	毎 日	読 売	合 計
①男性はフルネーム、女性は名のみで表現	4	22	0	26
②女性が一度フルネームで表現されたのち、二度目以降は名のみで表現	14	1	0	15
③女性が揶揄的な意味をこめられて、名のみで表現	1	1	0	2
合 計	19	24	0	43

は名のみで表現されるパターンで、朝日四件、毎日二二件、読売ゼロ件、合計二六件の使い分けがみられた。一方、女性が一度フルネームで紹介されたのち、次回以降名のみで表現されるパターンは、朝日一四件、毎日一件、読売ゼロ件で、合計一五件みられた。また、女性が揶揄的な意味を込められて名のみで表現されるケースもわずかだがあり、女性が名のみで表現されるパターンは三紙合計で四三件が数えられた。

(6) 一般記事における「さん」と「氏」の使い分けの経年変化

過去四回にわたって調査を行ってきた、同一の一般記事中における女性と男性とに対する敬称の使い分け件数の推移は表40に示されている。
それによると、一九八五年は、女性が

表 40 一般記事における敬称の使われ方の経年比較 (3紙合計) (単位: 件)

			1985年	1991年	1996年	2001年	
両方が登場 同一記事中	女・男で使い分け	女性「さん」/男性「氏」	12	25	36	7	
		女性「女史」/男性「氏」	4	7	0	0	
		その他の使い分け	—	—	46	13	
小計			16	32	82	20	
女男とも同敬称	女男とも同敬称	女性「氏」/男性「氏」	0	5	83	37	
		女性「さん」/男性「さん」	—	—	204	148	
		その他の同じ敬称	—	—	13	7	
小計			0	5	300	192	
敬称で登場 同一記事中に一方の性が単一	女性	女性「氏」	0	2	27	50	
		女性「女史」	32	40	10	1	
		女性「さん」	—	—	319	793	
		女性その他	—	—	12	40	
		女性ニックネーム	—	—	—	24	
	小計			32	42	368	908
	男性	男性「氏」	—	738	875	2041	
		男性「さん」	—	—	684	1855	
		男性その他	—	—	108	66	
		男性ニックネーム	—	—	—	28	
小計			—	738	1667	3990	
(オサマ・ビンラディン氏)			—	—	—	793	

※一印は未調査

「さん」、男性が「氏」という使い分けが一二件、女性が「女史」、男性が「氏」という使い分けが四件、合計一六件の性別による使い分けがみられた。これに対し、女男とも同一敬称の「氏」を用いているものは皆無であった。女性にも男性にも「さん」という同一敬称を使っている記事に関しては、この年および九一年には集計を行っていない。

九一年は、女性が「さん」、男性が「氏」の使い分けは二五件、女性は「女史」、男性は「氏」の使い分けは七件で、性別による敬称の使い分け合計は三二件へと増えている。それに対して、女性にも男性にも「氏」という同一敬称を用いているケースは五件みられた。

一九九六年は、女性には「さん」、男性には「氏」の使い分けが三六件へと増えた一方で、「女史」と「氏」の使い分けはみられなくなった。ただし、「その他の使い分け」をカウントするようになったので、使い分けの総数は八二件と大幅に増えている。一方、この年から女性にも男性にも「氏」という同一敬称を用いている記事以外に、女性にも男性にも「さん」を用いている記事および「その他の同じ敬称」を用いている記事の件数も数え上げることにした。その結果、女性も男性も「氏」が八三件、女性も男性も「さん」が二〇四件、「その他の同じ敬称」が一三件で、同一敬称を使用している記事は合計三〇〇件みられた。同一記事中に女男両方が登場する記事総数を一〇〇%として「使い分け比」をみてみると、敬称の使い分けが二一・五%であったのに対し、同一敬称の使用は七八・五%であった。

二〇〇一年になると、女性が「さん」、男性が「氏」の使い分けは七件へと大きく減り、「女史」と「氏」の使い分けは前回に続いて皆無、さらに「その他の使い分け」も一三件と数を減じた。そのため、同一記事中での敬称の性別による使い分けは、合計で二〇件にとどまった。一方、同一敬称に関しては、女性も男性も「氏」が三七件、

女性も男性も「さん」が一四八件、「その他の同じ敬称」が七件で、合計一九二件みられた。「使い分け比」は、敬称の使い分けが九・四%、同一敬称の使用が九〇・六%であった。以上の経年比較から、九六年から二〇〇一年にかけて、同一記事内においては両性間の敬称の使い分けが減って、大多数が同一敬称になってきていることがみとれる。

しかしながら、一つの記事の中にどちらかの性が単一敬称で登場する際の敬称のつけ方に目を転じると、状況は異なつた様相を呈してくる。

まず、女性と男性の新聞紙面への登場頻度をみておくと、九六年に女性が「氏」「女史」「さん」「その他」の敬称つきで登場した回数は合計三六八件であつたのに対し、男性が「氏」「さん」「その他」の敬称つきで登場した回数は一六六七件におよび、比率にして一八・一%対八一・九%と大きなへだたりが存在した。この傾向は、二〇〇一年でもほとんど変わつておらず、女性の「氏」「女史」「さん」「その他」の敬称つきでの登場が合わせて九〇八件であつたのに対し、男性の「氏」「さん」「その他」の敬称つきでの登場は三九九〇件で、比率は女性一八・五%、男性八一・五%であつた。このように、新聞への登場件数が女性と男性とで大きく異なる事態は、いまだに継続している。

次に、一つの記事の中に女性または男性が単一の敬称で登場する際に、それぞれにつけられた敬称を比較してみると、その内訳は女男で大きく異なつてゐる。すなわち、九六年に女性につけられた敬称は「氏」が七・三%、「女史」が二・七%、「さん」が八六・七%を占めていたのに対して、男性につけられていた敬称は「氏」が五二・五%で、「さん」はそれを下回る四一・〇%にとどまつていた。こうした女性には「さん」、男性には「氏」をつけるといふ傾向は、二〇〇一年にも変わる気配をみせておらず、女性につけられた敬称は「氏」が五・五%、「女史」

が〇・一%、「さん」が八七・三%であったのに対し、男性につけられた敬称は「氏」が五一・一%とやはり過半数を占め、「さん」は四六・五%であった。このように、一つの新聞記事に女性または男性が単独で登場する場合には、女性には「さん」、男性には「氏」がよりつけられやすいという傾向が、いまだにみられるのである。

なお、男性が姓名のフルネームで表記され女性の名のみで表記されるダブルスタンダード表現の推移は、表は省略するが、八五年で五件だったものが、九一年は二六件へと増え、二〇〇一年にも二六件となっており(九六年は未調査)、一九九〇年代以降変化がみられない。

(7) 死亡記事における「さん」と「氏」の使い分けの経年変化

死亡記事中の性別による敬称の使い分けの推移を示したのが表41である。

まず、一九八五年時点では、一つの死亡記事中に女男が登場する場合に女性には「さん」、男性には「氏」の使い分けがなされていたものは一五三件、全死亡記事一八九件中八一・〇%を占めていた。一方、女男のどちらかが単独で登場する死亡記事の場合、女性が「さん」のものはゼロ件、男性が「氏」のものは三〇件、一五・八%みられ、合わせて死亡記事の九六・八%で、女性には「さん」、男性には「氏」という敬称がつけられていた。同様に九一年も、女男双方が登場する死亡記事中で女性には「さん」、男性には「氏」の使い分けがなされていたのは一八一件、五九・二%、単独で登場す

表 41 死亡記事における敬称の使われ方の推移

(単位：件)

	1985年	1991年	1996年	2001年
女性「さん」/男性「氏」	153	181	129	72
女性「氏」/男性「さん」	0	0	0	0
女性「さん」/男性「さん」	0	0	0	41
女性「氏」/男性「氏」	0	0	0	0
女性名のみで「氏」	0	0	1	0
男性名のみで「氏」	30	103	95	39
女性名のみで「さん」	5	9	3	6
男性名のみで「さん」	0	0	3	19
その他	1	13	6	0
合計	189	306	237	177

る死亡記事では女性が「さん」のものはゼロ件、男性が「氏」のものは一〇三件、三三・七%みられ、全死亡記事中の九二・九%が、女性には「さん」、男性には「氏」の敬称をつけていた。

この傾向は、九六年にも大きな変化はなく、女男が登場する死亡記事中で女性には「さん」、男性には「氏」が使い分けられているものは一二九件、五四・四%、女男の一方が単独で登場する死亡記事では女性が三件登場し、その全てに「さん」の敬称がつく一方、男性が「氏」のものは九五件、三三・七%で、全死亡記事中の九割において女性は「さん」、男性は「氏」の敬称となっている。死亡者本人であれ、喪主等であれ、女性には「さん」、男性には「氏」の敬称が、半ば機械的につけられるのが、それまでの死亡記事の慣習であった。

しかし、二〇〇一年には、男性の敬称が「氏」のものは、女男双方が登場する死亡記事中では七二件、四〇・七%、また、女男の一方が単独で登場する死亡記事では三九件、二二・〇%と、合わせて六割程度へと減少し、その分男性で「さん」の敬称がつくものが各々四一件、二三・二%、一九件、一〇・七%と、三割強を占めるようになった。これは、先述したように、九九年から毎日新聞が死亡記事においては女性も男性も「さん」という敬称で統一するようになったことが反映しているからであるが、この時点では朝日と読売は、相変わらず女性には「さん」、男性には「氏」をつける使い分けが行われていた。

ところで、本調査の一年後の朝日二〇〇二年一〇月一三日の新聞週間特集記事は、「紙面をジェンダーの視点で」という大きな見出しを掲げ、社内の「取り決め集」を四年ぶりに改訂し、ジェンダーについてのガイドラインを盛り込むとともに、一般死亡記事の敬称を性別で使い分けずに「さん」で統一することを決めたと伝えている。「私たちの背中を押したのは、読者たちだ」との書き出しではじまるその記事には、敬称の使い分けについての苦情や意見が一般読者から寄せられたこと、それを受けて社内でも活発な議論が行われ、たとえば、死亡記事の敬称統一に

ついでには反論も出たが、「性差別という読者の声に応えることを最優先しよう」との決定がなされたことが述べられている。事実、二〇〇二年四月以降、朝日の死亡記事は、毎日と同様に登場人物の敬称を「さん」で統一している。新聞社が自らの紙面作りにジェンダーの視点を反映させようとした点は評価できよう。

しかしながら、議論を死亡記事欄の敬称統一に限定し、他の紙面での敬称の使い分けには言及しようとしないう姿勢には疑問が残る。これまでみてきたように、敬称の使い分けは死亡記事に限定されるものではなく、一般記事中で広範に行われていることを考え合わせるならば、死亡記事中の敬称統一を「取り決め集」に書き込んだ理念を、一般記事の作成にも反映させることが必要ではないだろうか。

おわりに

本稿では、二〇〇一年一月一日から一五日の朝日、毎日、読売の各紙面におけるジェンダー表現を、これまでの方法と規準を踏襲して調査・分析し、合わせて一九八五年以来ほぼ五年おきに実施してきた四回分の調査結果についての比較検討を行った。

その結果、女性を強調する表現は、二〇〇一年においてもかなりの高頻度でみられ、職業語を例外として相対的に出現頻度の低い男性強調表現とのアンバランスが浮き彫りになった。

しかし、経年比較を行ってみると、男性冠詞や男性に対するステレオタイプ表現が増えることにより、ジェンダー強調表現における女男間の開きには、縮少する傾向がみられる。

一方、女性隠し表現に関しては、男性に家族や世帯を代表させる表現は減じているものの、男性を親や夫婦の代

表とする表現は、いまだに根強く残っている。

さらに、ダブルスタンダード表現については、その典型である同一一般記事ならびに死亡記事中における敬称の使い分けは減少傾向にあるが、一般記事中への女性または男性の単独出現に際しては、女性には「さん」、男性には「氏」がつけられやすい傾向が明白に継続している。

また、男性を示す語尾のついたサラリーマンという語により「勤め人一般」を指し示す用法が、医療保険や年金、税制に関連する記事でかなりの頻度で用いられていることが明らかになったが、こうした表現は、それらの社会的に重要なイッシュューに対する女性の当惑者を剝奪しかねないという点で、問題をはらんでいる。少子高齢社会の進行が加速化し、これらのイッシュューが女男を問わず全ての人の間ですべて活発に議論されるべき現在、女性を排除しかねない、「新たな女性隠し表現」とでも呼ぶべきサラリーマンという語のこうした用法は、早急に是正される必要があるだろう。

本論冒頭でも指摘したように、新聞は、マス・メディアの中でも人びとが真っ先に「情報源として欠かせない」と認識し、「社会的に影響力がある」と感じているメディアである。また、信頼度が最も高く、他メディアによる引用・参照頻度も高い。女性と男性がともに、持てる能力を十全に生かすことのできる「男女共同参画社会」を築くためには、それにふさわしい、女性と男性を対等にあらわす表現方法が普及しなければならないが、こうした社会的メディア特性を有する新聞が、そのような表現を率先して使用し、広めていくことが重要だろう。

次回に予定している第五回調査は、本調査プロジェクトのほぼ二〇年目の「定点観測」となる。それにより、二〇世紀の終わりから二一世紀のはじめにかけての日本の新聞におけるジェンダー表現の傾向と推移が、よりダイナミックにみえてくることを期待したい。

- (1) (財)日本新聞協会 広告委員会「二〇〇三年全国メディア接触・評価調査」による。
 - (2) 接触率・接触時間についても同前調査より。
 - (3) 女性を男性から区別して表現する主要な「方法」に関しては、田中和子・諸橋泰樹編著『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて——新聞女性学入門』現代書館、一九九六年などを参照。
 - (4) 一九八五年のデータは、田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞紙面にあらわれたジェンダー——性差別表現の量的分析を中心に」『国学院法学』第二八巻第一号、一九九〇年、八七〜一九九頁に、一九九一年のデータは、同「新聞紙面にあらわれたジェンダー(その2)——性差別表現をめぐる一九九一年の紙面分析を中心に」『国学院法学』第三二巻第三号、一九九四年、一七〜一七九頁に、一九九六年のデータは、同「新聞は女性をどのように表現しているか——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』一九九六年調査より」『国学院法学』第三六巻第一号、一九九八年、八五〜一五〇頁に、それぞれ掲載した。
- また、一九八六年には新聞家庭面の分析を行い、その結果を同「新聞家庭面の女性学——性別面建ての歴史とその改廃をめぐる」『国学院法学』第二八巻第二号、一九九〇年、一〜四九頁に、男女雇用機会均等法の施行前の一九八五年と施行後の八六年および九一年における新聞求人広告の分析を行い、その結果を田中和子・諸橋泰樹「新聞求人広告は女性のニーズに込えているか」『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて』(田中・諸橋編著)前掲書、一五八〜一八七頁に、さらに一九九六年の求人広告の分析を行った結果を田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞求人広告にみるジェンダーの現状——一九九六年求人広告調査を中心に」『国学院法学』第三六巻第三号、一九九八年、一五七〜二三三頁に、それぞれ発表している。
- 「性差別語」の定義や、調査方法に関しては、「新聞紙面にあらわれたジェンダー——性差別表現の量的分析を中心に」前掲誌を参照のこと。
- (5) 『記者ハンドブック 新聞用字用語集(第9版)』共同通信社、二〇〇一年、八六頁。
 - (6) ただし、「女流」という冠詞自体が、男性を無微の標準とした女性への亜流扱いを示唆していることから、それが公的な賞やタイトルに冠せられること自体が再考されるべきであると、筆者らは考えている。
 - (7) 二〇〇四年一月国学院大学「社会学」の授業において、受講学生六七人を対象に実施したアンケート調査。
 - (8) さらに、新聞でよく目にする「サラリーマンとOL」という表現の非対称性について、一言だけ付言しておきたい。これらは、男性の勤め人・女性の勤め人を表す並列的で総称的な表現として、しばしばワンセットで用いられる。しかしながら、今回の

国学院大学の学生を対象としたアンケート調査からは、「サラリーマン」と「OL」が同じ被用者でありながら、基幹業務遂行者と補佐役といったように、異なった働き方や役割を担うものとしてイメージされており、両者の仕事内容や、責任、地位は、決して対等とはみなされていないことが明らかとなった。したがって、女男では働き方や役割が違うという前提を内包した「サラリーマンとOL」を「女男の被用者」の代名詞として無自覚に使い続けることが、女男のわけへだてのない働き方をめざす立場からは適切ではないことに、新聞は留意すべきであろう。

(9) ただし求人広告上で名称変更が行われ、表面的にはジェンダーニュートラルになっても、実際には女男別の求人採用が数多く行われていたことが、同電話調査で明らかになった。田中和子・女性と新聞メディア研究会・均等法研究会作業部会「改正男女雇用機会均等法下の新聞求人広告とジェンダー」——一九九九年電話問い合わせ調査の結果を中心として、「国学院法学」第三八巻第三号、二〇〇〇年、一一七〜一四九頁、および同「改正男女雇用機会均等法下の新聞求人広告とジェンダー」——一九九九年電話問い合わせ調査の結果を中心として「同誌、第三八巻第四号、二〇〇一年、八五〜一五頁を参照。

(10) 遠藤織枝編『女とことば』明石書店、二〇〇一年、中村桃子『ことばとジェンダー』勁草書房、二〇〇一年、上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会編『きつと変えられる性差別語——私たちのガイドライン』三省堂、一九九六年などを参照。

(11) 二〇〇四年一月の国学院大学「社会学」授業での前掲アンケート調査より。

(12) ただし、そのほかに「大学卒業から65歳までの男性というイメージが強いが、男女とわずサラリー（給料）をもらって仕事をする人のこと」「スーツを着て働く男女」と、両性を指し示すものとして認識している学生も、ごくわずか（二名）だがみられた。

(13) 「語源由来辞典」より。 <http://gogen-allguide.com/>

(14) 内閣府男女共同参画局「男女共同参画の視点からの公的広報の手引き——みんなに届く広報のために」二〇〇三年、二頁。

(15) 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編『岩波女性学事典』岩波書店、二〇〇二年、一九三〜一九四頁。

(16) 中村桃子『ことばとフェミニズム』勁草書房、一九九五年、六五頁。

(17) ただし夫をさす「良人（おっと）」ということばは存在する。この場合「人」は男性を示しており、ここには「人間＝男」観があらわれている。また、良人が「良い夫」の意味ではなく、良い夫が悪い夫かにかかわらず妻から夫を指して呼ぶ呼称として用いられている点も興味深い。

- (18) この場合の「人」も良人の「人」同様男性をあらわしている。
- (19) 遠藤織絵『気になる言葉——日本語再検討』南雲堂、一九八七年、四三頁。
- (20) 遠藤、同前、四一頁。
- (21) ウォルタ・リップマン、掛川トミ子訳『世論(上)』岩波文庫、一九八七年(原著一九三二年)、一一一〜一二二頁。
- (22) リップマン、同前、一二三頁。
- (23) リップマン、同前、一三〇頁。
- (24) 中村、前掲書、六五頁。
- (25) 詳しくは、前掲の『記者ハンドブック 新聞用字用語集(第9版)』共同通信社、五二〇〜五二二頁を参照。

* 共同執筆者

田中和子(国学院大学法学部教員)、諸橋泰樹(フェリス女学院大学文学部教員)、村田太郎(株)ケー・デー・シー職員)、實川いづみ(和光大学大学院社会文化総合研究科修士課程)、千葉智滋(株)富士経済東京マーケティング本部研究員)、久保律子(株)スリーエス・ネットワークス職員)